彼れは獨り門弟と融合一致して居たばかりでなく、又日本帝國と融合一致して居ました。當時我が帝國は、德川幕府の末路に當り、內憂外患一時に起こり、殆んど危急存亡の秋であつたのであります。血性の彼れ松陰、どうしてそれを傍觀して居られませう。彼れが國禁を犯して米艦に投じ、外國の事情を探らうとしたのもこの爲めであります。彼れに取つては帝國の利害休戚は己れの利害休戚でありました。帝國の一隅に起つた一小事件でも、彼れの心には電氣の如く感じたのであります。帝國の心搏は一鼓一動彼れの胸に響いたのであります。隨つて彼れの敎授は、古人の閑文字を敎へるのでなく、經書史傳を藉りて胸中に欝勃たる愛國の至情を吐露するのであります。敎育者は被敎育者よりも先に、その目標に對して自ら融合して

居なくてはなりません。彼れが門弟岡田耕作に示した文に、かういふのがあります。

正月二日岡田耕作至る。余爲めに孟子を授け、公孫丑下篇を讀み訖る。村塾の第一義は、閭里の禮俗を一洗して、戈を枕にし槊を横たふるの風をなすに在り。これを以て講習除夕を徹して未だ嘗つて放學せざる也。何如ぞ年一たび改まれば、士氣頓に弛み、三元の日、來たりて禮を修むる者あれども、未だ來たりて業を請ふ者を見ず。今や墨使府に入り、義士獄に下り、天下の事迫れり。何ぞ除と新とにあらんや。然り而して松下の士猶皆此の如し。何を以てか天下に倡へんや。耕作の至る適〻群童の魁をなす。群童に魁するは乃ち天下に魁するの始め也。耕作年甫めて十歲、厚く自ら激勵す。其の前途豈測るべけんや。

これが十歳の子供に示す文とは驚いたものですが、國家と融合し、門弟と融合し、一日も早く國家の急に赴く人傑を作り上げようと熱中して居た彼れには、年齢の幼壯などは念頭になかつたのであります。又大晦日も元日もなかつたのであります。門弟品川彌二郎が、無斷缺席したのを責めて、次の樣な催促狀を出して居ます。

彌二の才得易からず。年稚しと雖も、學幼しと雖も、吾れの相待つことは長者に異ならざる也。何如ぞ契濶乃ち爾るや。時勢切迫、豈内に自ら惧るゝ者あるか。抑己れ自立して、吾れの論に於て與からざるものあるか。逸遊敖戯して學業を廢することは、則ち彌二の才決して然らざる也。說あらば則ち已む。說なくんば則ち來たれ。三日を過ぎて來たらずんば、彌二は吾が友に非る也。去る者は追はず。吾が志決せり。

これでは如何な忘け者でも怠けては居られますまい。又如何な頑童でも心を動かさずには居られますまい。實に彼れは敎育界の基督であります。熱烈火の玉の如く、これに觸れるもの燒き盡さずには置かないのであります。

彼れが野山の獄中から妹に送つた書中に

人は一心不亂になりさへすれば、何事に臨み候ても、ちつとも頓着はなく、繩目も、人屋も、首の座も、平氣になれ候から、世の中に如何に難題苦患の候ても、それに退轉して、不忠不孝無禮無道等仕る氣遣はない。

といつて居ます。この一心不亂こそ、私の謂はゆる體驗であります。心を一所に集注して脇目をふらない所に體驗が成立つのであります。

彼れが門弟以外に心を馳せず、國家以外に心を向けなかつた所に、彼れは門弟を體驗し、國家を體驗したのであります。一たび體驗の境地を握つた彼れには、一身の利害得喪などは問題でありません。勞苦も艱難も物の數ではありません。否彼れは何時でも生命を投げ出して居たのであります。生命を投げ出した人ほど强いものはありません。彼れの一言一句に驚くべき威力のあるのも、全くこれが爲めであります。何職業の人であれ、この體驗狀態に達せない限り、偉大な成績は收められません。體驗に入つて始めて實在の驚くべき活動が始まるのであります。彼れ松陰が教育家として驚くべき成績を收めた秘鍵も、實に玆にあるのであります。屑々たる教育の理論や方法に拘泥して、この秘鍵を握ることの出來ない教育家は禍であります。一生涯兀々として學童に對して居ても、何事をも成すこと

が出來ないのであります。重ねていひますが、松陰は教育界の基督であります。

第四篇

體驗に入るには

上來說き來たつた通り、體驗といふものは、人生のアルファであり、オメガであります。體驗なき生活は灰の如く、拔殼の如く、化石の如く、白骨の如くであります。人は只體驗によつて宇宙の唯一實在と呼吸を通じ、血行を共にし、そしてその生命に入ることが出來るのであります。震天動地の活機、纖細巧緻の妙用、皆これより出るのであります。然らばその體驗に入る道は、どうしたらよいで

せうか。これが、これから說かうとする題目であります。

體驗生活に入る方法を知らうといふならば、眞に體驗に入つた人の足跡を尋ねて、それを手本とするのが一番近道であります。藝術家の生活などは、よい手本と思ひますが、藝術家それ自身はそんなことには無頓着で、どうしてそれにはいつたか、はいらないか、自ら知らずに居るのであります。政治家、軍人、實業家等にも、實際體驗生活にはいつて居た者もないではありませんが、何れも藝術家同樣自覺しないのであります。そこになると宗教家は人を體驗に導くのが本職でありますから、彼れ等の用ひ來たつた方法には大いに參考となるものがあるのであります。併し彼れ等とても多くは傳統的方便を無理解に蹈襲するだけで、その眞正の意味を領解して居な

い様であります。これが彼れ等に宗教を時代に相應させることの出來ない所以、又宗教の振はない所以であらうと思ひます。併しとにかく、彼れ等の慣用し來たつた方法の中には、是れまで頗る有効であつたものもあるし、又現に有効なものもあるのでありますから、大に參考しなければなりません。教育の仕事も、本來宗教と同性質のものでありますから、何か研究されたものがなければならない筈でありますが、これにはとんと參考になるものがありません。偶々吉田松陰の様な突飛な教育家が出て、やはり無自覺の裏にあんな成績を擧げた位のものであります。それで私は、私自身の經驗を主とし、宗教家の經驗を參案して、體驗へ進入する極めて的確な方法を提案しようと思ふのであります。

この方法によれば、知見の廣狹高低を問はず、それ〴〵の程度に應じて、何れも體驗の生活に入り、唯一實在と融合して、自由無礙の境地を味ふことが出來るのであります。以て既成宗教を改良することが出來、以て新宗教を組織することが出來、以て倫理道德を向上せしむることが出來、以て藝術の眞を掴むことが出來、以て教育に新生命を與ふることが出來、以て政治、軍事、產業、その他百般の職業、有らゆる人間生活を根柢より改良することが出來るのであります。

先づ第一に

私の謂はゆる體驗進入の方法は極めて單簡であります。私は先づ

第一に

『或る目標に向つて脇目をふらずに專往邁進せよ。』

と勸めます。佛家の謂はゆる精進であります。何目標であれ、これぞときめた目標に向つて、一心不亂となり、純一無雜となり、血眼となつて進むのであります。最初決意した當座は、多少骨折つて進んでも見ませうが、暫くたつと色々の雜念が湧いて來て、この仕事よりはあの仕事の方がよいとか、あちらの方に見える快樂が戀しいとか、こんなに刻苦して見ても前途の見込が少いとか、とかく心を分散させ、體驗的統一を妨げる惡魔が、むら〳〵と簇り起つて來るのが普通であります。釋迦が佛陀伽耶の菩提樹下に端坐して居た時、三人の美女が誘惑に來たとか、種々雜多の惡鬼羅刹が强迫に來たとかいふのは、卽ちこれを指すのであります。この場合、それに秋波

を送つたり、それに恐ぢ怖れて尻込みしたりしては大變であります。こゝが修行者の血眼になる所であります。降魔の利劍を大上段に振りかざし、來る惡魔も〳〵端から〳〵木端微塵に斬り捨てなければなりません。この難關を通り拔けますと、路が段々平坦になつて參ります。興味が少しづつ出て參ります。征伏の快感が芽を出して來ます。この機をはづさず益々精進するのであります。少しでも油斷をすると例の惡魔が飛び出して來て、誘惑を試み、强迫を試みます。そして心を分散させようと致します。それを切り拔けると路は益々平坦になつて來ます。春風がそよ〳〵と吹いて來ます。しまひには、そのことをするのが何となく面白くて止められない樣な氣分になつて來ます。惡魔ももう追懸けて來ません。すると何ともいひ樣のない、充實した、緊張した、自由な、光りに滿ちた、比較を絕した、

新世界が開けて來ます。かうなると自分が目標か、目標が自分か、差別がなくなります。これが本當の體驗にはいつたのであります。物我一如の眞際に達したのであります。この時には無論自覺はありません。謂はゆる快苦の感情もありません。慾念慾情もありません。時空二間もどこかへ消えてなくなります。因果律も影を潜めてしまひます。併し、後からその足跡を調べて見ると、知情意の活動も、體力の活動も、實に目覺ましいもので、到底人間業とは思はれない樣な、自分ながら驚嘆する樣な、業蹟を遺して居るのであります。天才とか、英雄豪傑とかが、偉大な仕事をするのは、皆この境地に於てするのであります。以上は極めて完全に體驗にはいつた狀態を申したのでありますが、大抵の場合に於ては、多くは半醒半醉、絶對界と相對界と、無意識界と有意識界と、混淆して現はれるのが普

通であります。

簡單な事件でありますと、右の樣に順序よく運ばせることが出來ますが、事人間の一生に亘る樣な題目になりますと、仲々かう一氣呵成には參りません。その間に活動の中絶もあり、他の題目の挿入もあり、隨つて誘惑の惡魔は隨時にその手を伸ばして來ます。これには容易ならぬ奮鬪を要します。實に人の一生は奮鬪の生活であります。否その奮鬪が人間の眞の生活であるのであります。最後の自由無礙の世界、寂光の淨土といふものは、我れ〳〵は時々これを味ふことが出來るだけで、常住不斷にその世界に住することは出來ません。我れ〳〵に肉體がある限り、物心二元の世界より全く脱出することは出來ないのであります。否、物心二元界に住すればこそ、

我れ〳〵の體驗は益々その内容を豊富にするのであります。それですから、我れ〳〵は何處々々までも奮闘を續けなくてはなりません。死の刹那まで奮闘を續けなくてはなりません。奮闘、それが我れ〳〵の生命であります。奮闘中の我れ〳〵の姿は、恐らく圓滿、球の様なものではありますまい。椎の實形、砲彈形をなして居るだらうと思ひます。けれども時々圓滿なる球形の我れになることもあつて、實在の眞景に接し、實在の活力を體得し、これを味ひ、これに醉ふことが出來るのであります。

一度體驗の眞味を嘗めたものは、よし誘惑の魔の手が伸びて來ても、これを撃退することはさほどの困難ではありません。私が家庭生活に於て、前後通じて三十一年間病兒病妻の看護に盡した場合な

どでも、最初の十數年間の苦痛は、今思ひ出しても身ぶるひする位でありますが、一旦決意を固めて、それに純一無雜となつてからは、有らゆる誘惑を征服し、終には平和な、しかも充實せる生活を續けることが出來たのであります。そして奮闘も苦痛の奮闘でなく、心地よい奮闘を續けたのであります。昨年一月妻が亡くなつてからは、急に奮闘の目標がなくなつて、一時甚だ寂寞を感じたのでありますが、奮闘の惰勢は私を又容易く次の奮闘に導いてくれまして、同じく充實した平和な生活を送つて居ます。それは後章に於て詳述するでありませう。とにかく、一度でも二度でも勇猛精進によつて體驗の眞味を嘗めることが最先の必要事であります。

右の様に勇猛精進をなすについて一番大切なのは、心を純眞に持

つことであります。少しでも、捉はれた心、僞りの心、隔りの心、上滑りの心があつてはなりません。眞劍も眞劍、斬れば血の出る樣な心で向はなければなりません。それですから、巧言令色人前を飾る人や、しんねりむつゝり容易に內心を見せない人や、理知の手桎足械に動きのとれない人や、唯我獨尊己れの鼻先ばかり見て居る人や、私慾の城に立ち籠つて他を見ることの出來ない人や、偶然に得た富貴榮華に醉ひ倒れて現狀に滿足する人やは、容易に精進道を蹈むことが出來ません。却つて、善にも强ければ惡にも强く、任俠氣を負ふ人や、何事にも徹底的に行かうとする人や、猫の死んだにも涙を絞る人や、虛心坦懷よく人言を納れる人や、率直淡泊よく喜びよく腹立つ人や、淪落の淵に陷ちこんで出ることの出來ない人やが、精進道に入りやすいのであります。

次に

次に目標の定め方を說明します。私は

『勇猛精進さへすれば目標は何でもよい。』

と斷言します。無論目標の種類によつて體驗の內容に大小廣狹の別があらうとは想像されますが、共に實在の眞景を見、實在の活動を體得することが出來るのであります。知見の廣い人は、とかく複雜な、高尙な目標を揭げたがるのでありますが、却つてその統一に困難するのが常であります。知見の廣い人が容易に體驗にはいられないのは、一つはこの爲めであります。

支那禪宗の六祖慧能は、南宗禪を開いた有名な禪僧でありますが、誠に無學な坊さんであつたのであります。彼れは一百姓の悴で、二十四歳の時、五祖弘忍の門下に入り、毎日々々米舂き部屋にはいつて、石を腰にくゝりつけて碓を蹈んで居たのであります。入門八箇月の後、師弘忍が門下一同に課した悟道の偈に首尾よく及第し、千有餘名の同門の先輩を措いて六祖の衣鉢を受けたのであります。これを以て見ても、體驗の成否は知見の廣狹によらないことが明かであります。

宗教の方では、目標を神とか佛とかとして居ますが、それはどちらでも差支ないのであります。天の父を目標としても、阿彌陀佛を目標としても、大日如來でも、觀自在菩薩でも、勢至菩薩でも、普

賢菩薩でも、妙法蓮華經でも、趙州の無字でも、庭前の柏樹子でも、片手の聲でも、天御中主の尊でも、天理王の尊でも、金神でも、勇猛精進して體驗しさへすれば、結果は同じことになるのであります。只今日の宗教家は、その目標たる神や佛を、絶對無限の能力者となし、それに歸依祈願すれば、一切の惡事災難を免れさせ、平和と幸福とを與へてくれるものとして、說くのでありますが、これは次の樣な意味に解釋しなければなりません。『一所懸命に、眞心こめて、或目標に向つて精進すれば、體驗に入つて實在の流れと合一し、そこに自由無礙、無煩悶、無苦惱の世界が展開される。』と。若しさうでなくて、己れ以外に神とか佛とかいふ能力者が客觀的に存在し、それが自己の意志によつて、勝手氣まゝに人間に禍福を與へるものと解釋すれば、それは最早迷信で、科學の知識と衝突を免れないの

であります。成る程、神佛といふものが、祈願さへすれば、こちらの思ふ通り、禍から免れ、福を與へてくれるものであつたならば、慾の深い人々を歸依させるには都合がよいのでありませうが、それは慾得づくの信仰で、慾得の爲めには又容易に崩れるものであります。知見の進歩しつゝある今日に於て到底命脈のあるものではありません。『神や佛は宇宙唯一實在の別名で、我れ〳〵は勇猛精進に依つてそれになり得るもの』と解釋することに依つて、始めて神佛の意義が正しくなるのであります。

『目標は必ずしも慾得づくに我れ〳〵を引きよせる力のあるものでなくともよい。』といふことは、私自身の經驗が確然とこれを證明して居ます。私が體驗にはいつて實在の眞際をつかみ得たのは、主と

して三十一年間の病兒病妻の看護であります。病兒病妻の看護、こんな目標に、何の私をひきよせる力がありませう。寧ろ私を目標から逃げ出させる位のものであります。それも若干の看護をすれば、後に治癒の見込でもあるのならばとにかく、どの醫者も〳〵治癒の見込はないといひ、私自身の直覺にもその見込は全然なかつたのでありますから、私がこれに沒頭するまでには、可なり困難を感じたことは無論であります。けれども私は勇猛心を振ひ起してこれに沒頭したのであります。そして終に實在の眞相を見たのであります。これを以て見ても、目標に我れ〳〵を引きよせる樣な性質を附與するのは、衆愚を誘引する善巧方便だといふことが明白であります。

是に於て・『目標は何でもよい。勇猛精進が宗教の唯一生命だ。』と

いふことが益々確實になりました。然るにこれまでの宗教は、多くは傳統的方法に拘泥して、科學方面から見ると迷信に相違ないことを襲用して居ます。宗教の改革はどうしても、右の根本原理に立脚しなければなりません。

私の新宗教は

既成宗教でも、私が前にいつた様に神佛の意義を定め、勇猛精進が神となり佛となる唯一方便であるといふことに着目して、これまでの儀式方法を改め、一切の迷信を去つて合理的に進む様になり得るならば、無論その生命は永遠に續くてありませう。けれども傳統的形式に拘泥して、宗教の眞精神を掴むことが出來ないとすれば、

無智蒙昧なる或階級中に僅かにその餘喘を保つだけて、到底生氣撥剌たる活躍は出來ないにきまつて居ます。

私の茲に提唱せんとする新宗教は、一切の傳統的儀式方法を棄て、直ちに宗教の本質を捉へて、新たに一旗幟を立てるものてあります。而かも極めて單簡明瞭であります。

私は先づ始めに

『己れの職業に勇猛精進せよ。』

と申します。人として職業のないものは甚だ稀れてあります。否何かの職業を持つのが今日の人間として避け難い歸趨と思ひます。私は何人もこの職業を目標として無我夢中に精進することを勸めるのであります。その間に色々の誘惑も現はれるてありませう。又各般

の障害も起こるのでありませう。けれどもそれ等には一切目をくれず、血眼になつて突進しなければなりません。そこに自由無礙の世界が展開されることは私の堅く保證するところであります。

職業にも色々の種類があります。現象間の因果關係を對象とする學者の職業、空間的時間的リズムを對象とする藝術家の職業、社會人類を聖の方向に導く宗教家教育家の職業、民人に代りて國家の組織制度を統整し、民人の和平を維持する政治家、軍人の職業、民人の物質生活に必要なる物資を生産し、有無相通ずる農工商等の職業などがその主なるものであります。人が何れの職業を選ぶべきかは、その人の天禀の傾向及び環境の相違によつて豫定は出來ませんが、精進の目標としてはどれても差支ありません。徒らに他人の職業を

羨望して、一旦定めた職業に專念出來ないものほど、不幸なものはありません。その動搖不安の間が、人生の地獄であるのであります

次に私は

『他人との融合に勇猛精進せよ。』

と申します。人間は社交動物であります。孤獨で生活することは出來ません。實在の統一性は自然にそれを要求するのであります。社交、そこに人間の倫理生活が始まります。社交は他人との融合でなければなりません。他人との融合は、謂はゆる善で、愛とか、慈悲とか、仁とかいふ思想は、この他人との融合に命名したものであります。

社交にも色々の範圍の相違があります。最も單純なのは、男女の同棲生活でありまして、それから漸次範圍を擴大して家族生活、大小各種の社會生活、國家生活、全人類生活等に及びます。

男女間には戀愛と稱する實在の統一性の現はれがありまして、努めずして融合一致を促進させます。併し、己れの性的欲望を滿足させんが爲めの戀愛であつては、到底本當の融合は出來ません。本當の融合は、無我の戀愛によつて始めて得られるのであります。兩者が全く同心一體となつて、呼吸も心搏も相通ふ狀態にまで至らなければ駄目であります。それには最初大に己れを殺す必要があります。こゝが勇猛精進の必要なところであります。彼の、同棲者をおいて他に增す花を拵へたり、恪氣嫉妬に燃えたりして居る男女關係は、

全く利己的戀愛で、無我の戀愛卽ち本當の融合ではありません。それですから己れの現在の戀愛生活が、本當のものか否かを檢證しようと思ふならば、自分は何時でも己れの有する總てを愛人に捧げ得るか否かを反省して見れば分かります。例へば己れの生命さへも少しも惜しくないといふ狀態、否惜いの惜しくないといふことも全く忘却し去つた狀態であれば、それは本當の戀愛生活であります。夫婦の關係はこゝまで行かなければ本當でありません。こゝまで行つて自己は二人大に擴大したのであります

家族生活卽ち親子兄弟姉妹等の共同生活も、夫婦生活と同樣の心得を以て、全く融合一致するまで、精進しなければなりません。これにも親子の愛、兄弟姉妹の愛等の實在の統一性の現はれがありま

すから、比較的困難は少いのでありますが、夫婦の戀愛關係に較べますと、その力が弱いのが常てあります。隨つて餘程の勇猛心を振ひ起こして精進しませんと、融合することが出來ません。初めの間は、己れを殺しに殺して努力する必要があります。さうして居さへすれば、お互の間に暖い感情が湧いて來て、自然と同心一體となることが出來ます。これて自己が數人大に擴大した譯であります。

社會生活、國家生活、全人類生活も、前と同樣の心懸けを以てすれば融合の出來ないことはありません。社會の爲め國家の爲め全人類の爲めに、生命をも平氣に捨てた古の志士仁人は、全くこの境地にまで到達して居たのであります。普通一般の人々てもこゝまで到達しなければ、社會も國家も全人類も平和な生活は出來ません。利

己の殼に閉ぢ籠つて居て、組織制度の不完全ばかりを詛つて居る間は、よし組織制度が改正せられたとしても、眞の平和が將來する氣遣ひはないのであります。社會政策等に心を向けて居る人々の三省すべき所と思ひます。人もこゝまで來れば、自己が社會大、國家大、全人類大に擴大した譯てあります。

次に私は

『自己の統一に勇猛精進せよ。』

と申します。自己といふものは、極めて狹いものとも解釋が出來、又極めて廣いものとも解釋が出來ます。自己を己れの個在身體に限つて見る時には、極めて狹いものでありますが、前に說いた樣に、自己はいくらでも擴大するもので、宇宙は自己を離れて存在するも

のではないと見る時には、極めて廣く、宇宙卽自己といふことになります。それですから、自己の統一を完成すれば、我れ〳〵は宇宙實在そのものになることが出來て、宇宙大に擴大したのであります。聖といふもこれであり、神といふもこれであり、佛といふもこれであらうと思ひます。

前に擧げた二つの體驗だけでも、自己は勿論統一します。そして實在の眞景を見ることが出來るのでありますが、まだその現はれの方面が狹小であります。この最後の自己の統一を完成して本當の大統一が完成するのであります。併し實際に於ては、この大統一が完成するといふことは、殆んど不可能であります。我れ〳〵はこの大統一の過程にあつて、勇猛精進を續けて居るものと見なくてはなりませ

ません。それ故勇猛精進が人生だといつても差支ないのであります。實在の流れ、それは無始無終の勇猛精進であります。實在それ自身が大統一の完成には達して居ないのであります。又その期はないのであります。大統一の完成などといふのは畢竟一つの理想であります。神も佛も聖も一つの理想であります。否、煩悶なき勇猛精進そのものを神とし佛とし聖とするのが本當の解釋であります。別に神あり佛あり聖ありと思つたら大間違ひであります。

我れ〳〵が職業に從事し、社交にたづさはつて、勇猛精進して居る間は、我れ〳〵の自己は無論統一して居ますが、我れ〳〵は四六時中これ許りに沒頭しては居ません。この外に運動の時間もあり、趣味を味ふ時間もあり、讀書の時間もあり、睡眠休息の時間もあります。運動趣味讀書の時間には、やはり一切を忘れてそれに精進す

べく、睡眠休息の時間には、又一切を忘れて安々と休養すべきであります。尙この外に全く己れ一人となる時間があります。普通の人にあつては、この時間が自己を分裂させる機會を與へ、煩悶の種子を蒔く機緣を作るので、甚だ危險な時間であります。斯る場合こそ大に修養が必要てあるのてあります。修養といつても別のことはありません。やはり自己の精進的統一をするのてあります。私が日常實行して居る方法は次の通りであります。

私が病兒病妻の看護に從事して居た間は、晝夜の別なく、それを對象として自己全部を傾注して居ましたから、私は長い年月の間惱みのない精進的統一を續けることが出來ました。ところが、五年前に病兒が逝き、昨年一月病妻が亡くなつてからは、急に統一の對象

物を失ひ、非常に寂寞を感じました。寂寞、それは心の何處かに空隙を生じた證據であります。そこで私は考へました。『この空隙は惡魔侵入の空隙である。自分は速かに精進的統一の昔に還らなければならぬ。』と。そこで次の樣な方法を案出して實行を續けて居ます。

毎朝顏を洗ひ髮を梳ると、佛前に至り（私は妻と長男とを假りに觀自在菩薩として居ます。佛前といふのはこの菩薩の前といふことであります。）純眞無垢の心を持して、般若心經を誦讀します。私がこの經文を選んだのは文字が短くて暗記に便利な爲めで、他に意味はありません。それを讀み終ると次にその經文の末尾にある咒文卽ち陀羅尼を反復いたします。陀羅尼は『揭諦。揭諦。波羅揭諦。波羅僧揭諦。菩提。薩婆訶。』といふのでありまして、『自ら度し、他を

度し、彼岸に到り、普く彼岸に至りて、大覺、速かに成る。』といふ意味ださうであります。併し私にはその意味などはどうでもよいので、只精進の道具につかつて居るだけであります。私は初め珠數を爪繰りながら、この陀羅尼を百八遍唱へます。あとは珠數の爪繰りをやめて回數を定めず一二百遍續けて唱へます。唱へ方は一息に成るべく多回唱へることを旨とし、息の續く限り唱へて、急に吸息を太く短かくいたします。唱へて居る間に色々の雜念が起こつて來て、心があらぬ方向に分散して困ります。そんな時には一層聲を張りあげて雜念を驅逐することに努めると同時に、唱聲が手の先、足の先、全身のあらゆる部分から、寄り集つて來る樣にとの心持ちで、一心不亂に唱へます。雜念は消えては起こり、起こつては消えますが、全身の力を籠めて唱讀して居ますと、段々と統一して參りまして、

耳は次第に外界の音響から遠ざかり、(目は初めから瞑つて居ます。)熱い涙が兩瞼の間から溢れ出さうになり、熱い寒いも朦朧として、身體の在り場所さへ覺えず、天地只聲帶の振動だけになつて參ります。かうなつて來ると、唱讀をやめて、暫くの間息をあるかなきかの境に止めて居ます。すると心身全く脫落して、一切の形容を絕した忘我の鄕にはいります。卽ち自己が完全に統一したのであります。

これは毎朝する精進でありますが、仕事の合ひ間〳〵、車に乘つて居る時、枕について眠に入らない前など、又全然已れ一人の世界となることがあります。こんな時には、觀自在菩薩の名號を口中に念ずることにして居ます。斯くの如くにして、一時一刻も精進から離れない樣に努めて居るのであります。

その效驗は著しいもので、それからといふものは寂寞の感じは少しも起らなくなつたと共に、緊張充實の感が起こり、心の平和なことは言語に盡せません。それに又身體的機能が調つて參りまして、既往約一箇年ばかり風邪一つひいたことがありません。それはその筈であります。風邪などといふものは多く心身の弛緩した場合に罹るもので、緊張した場合には寄りつくものでありません。私もどうかすると風邪に襲はれたなと思ふことがあります。そんな場合は一層右の精進的統一をやります。すると何時の間にか風邪は逃げ出して平生通りになるのであります。風邪ばかりではありません。他の病氣でも、心身一如の道理から、自已の統一を完全に行つて居れば、大抵は罹りません。よし罹つても精進的統一を行へば、身體の自然

良能は障碍なしに活躍いたしますから、病氣は自然に平癒します。醫師の治療もつまりこの自然良能に依賴して始めて效を奏するので、自然良能が程よく働かない限り、病氣の快くなる道理はありません。それ故病氣は醫師の治療も大切でありますが、精進的統一は一層大切なものと思ひます。私は以上の方法を應用して、相當に色々の人の病氣を癒してやりました。

右は私のやつて居る方法でありますが、方法はこれに限りません。禪宗の坐禪などもよいでせう。岡田式靜坐法でもよいでせう。南無阿彌陀佛も、南無妙法蓮華經も、天の父もよいと思ひます。又他に自分が何か考案して、實行しても差支ないのであります、私は次に記した『南無精進』『南無精進人』と唱へることを御勸めします。

以上私の新宗教を要約すれば『精進』の二字となつてしまひます。惱みなき精進は宇宙實在の眞景であると同時に、神といひ、佛といひ、聖といふもこの別名に過ぎないのであります。嗚呼惱みなしに職業に勵精する人々よ。嗚呼惱みなしに他人との融合に勵精する人々よ。嗚呼惱みなしに自己の統一に勵精する人々よ。諸君はそれだけで既に神になつたのであります。それだけで聖になつたのであります。それだけで佛になつたのであります。若しこの世の中に於て恭敬禮拜すべき何ものかありとすれば、かゝる人を措いて他には何もないのであります。

南無精進。

南無精進人。

淨土佛教の方便は

佛教には色々の宗派があつて、人を體驗に導く手段方法が違つて居ます。併し、大別して聖道門淨土門に分かつことが出來ます。聖道門といふのは一に自力門と稱し、自分の力で苦行精進し、この土に於て大涅槃卽ち圓融無礙の境地に至らしめようとする宗派で、禪宗、眞言宗、天台宗、法華宗、華嚴宗などがそれであります。淨土門といふのは一に他力門と稱し、阿彌陀佛を最勝能力者と見做し、自己の計らひを捨てゝ、一切を彌陀にまかせ、念佛の一道を以て未來の淨土に往生させようとする宗派で、淨土宗、淨土眞宗などがそれであります。これから淨土門の佛教について考察して見ます。

淨土門でいふ彌陀といふ言葉は、これを盡十方無碍光と譯して見たり、無量壽、無量光と譯して見たりするところから考へて見ると、それが宇宙實在そのものを指して居ることは疑ひがありません。それを宗教的方便を以て人格化し、阿彌陀佛と稱する最勝能力者を假定したのであります。この阿彌陀佛は最初の名を法藏菩薩といひ、『己れの名號卽ち阿彌陀佛を唱へた人々は、何人でもこれを攝取して捨てず、悉く極樂淨土に迎へてやる。』といふ念願を起こし、『若しこれが出來なければ、自分は決して成佛せぬ。』といふ誓ひを立てたのださうであります。彌陀の本願といふのがこれであります。それですから、人はこの本願を信じ、只南無阿彌陀佛の名號さへ唱へて居れば、彌陀はそれ自身の本願の船に乘せ、有らゆる衆生を彼岸淨

土へ連れていつてくれると申すのであります。誠に簡單明瞭な方便であります。それ故これを一に易行道と稱し、他の聖道門の手段を難行道と申して居ます。この彌陀の本願といふのは、實在の流れそのものを指したので、人間の理知の分別では、何事もなし得ないから、成るべく早くその流れに合一して、一切をそれに任せるがよいといふのであらうと思ひます。淨土眞宗の開祖親鸞上人の消息文に次の様なのがありますが、これを見ると、それ等の意味が朧げながら分かります。

自然法爾の事

（前略）自然といふは、もとより然らしむるといふ言葉なり。彌陀佛の御誓ひの、固より行者の計らひにあらずして、南無阿彌陀

佛と頼ませ給ひて、迎へんとはからせ給ひたるによりて、行者の善からんとも惡しからんとも思はぬを自然とは申すぞと聞きて候。誓ひのやうは、無上佛にならしめんと誓ひ給へるなり。無上佛と申すは、形もなくまします。形もましまさぬ故に、自然とは申すなり。形ましますとしめす時には、無上涅槃とは申さず。形もましまさぬ樣をしらせんれうなり。この道理を心得つるのちには、この自然のことは常に沙汰すべきにはあらざるなり。常に自然を沙汰せば、義なきを以て義とすといふことは、猶義のあるになるべし。これは佛智の不思議にてあるべし。

知見の進まざる民衆に對しては、右の樣に實在を人格化し、それに大慈大悲の本願あつて、唱名念佛する人々を極樂淨土へ連れて行

くといふ樣に信じさせることは、民衆歸依の方便として已むを得ないことであり、又有效であつたと思ひますが、今日の如く科學が進歩し、民衆の理知が明かになつて來ては、そんな方便を眞面目に信ずるものは段々なくなるであらうと思ひます。なぜ實在の眞景をありのまゝに直視させないのでありませうか。直視した實在の眞景は自己の直接經驗でありますから、信ずるも信じないもありません。天地間これほど確實なものはないのであります。今の淨土門の人々は、既にかういふ風に改めて居ますかどうか、私は十分に知らないのでありますが、若しさうでなかつたとすれば、速かに改められる樣希望するものであります。

併し體驗へ導入の方便としての唱名念佛は實に名案であつたと思

ひます。その簡單な點に於て、その行ひ易い點に於て、實に天下一品であります。方便は總べてかういふ風でないと流布弘通はむつかしいと思ひます。念佛を方便といふと、その派の人には厭に思ふものがあるかも知れませんが、私は、『彌陀の本願を信ぜよ。名號を唱へよ。』といふのを、精進の道具卽ち方便と見て居ます。親鸞が

『名號を唱へん者をば、極樂へ迎へんと誓はせ給ひたるを、深く信じて唱ふるがめでたきことにて候なり。信心ありとも名號を唱へざらんは詮なく候。又一向名號を唱へんずるは疑ひなき報土の往生にてあるべく候なり。』

といつて居るのを見ても、精進の方便たることは略推察がつきます。それですから唱名念佛は敬虔な心を以て本眞劍に唱へなければ役に立ちません。且つ心に閑のある場合には何時でもこれを唱ふるのが

本當と思ひます。否實際にも、信者等はさういふ風に努めて居ると思ひます。これが自己統一の精進でなくて何でありませう。然るに茲にかういふことがあります。昔、高野山に明遍僧都といふのがありました。この人は眞言宗を捨てゝ淨土宗にはいつた人でありますが、善光寺へ參詣の途次、偶々天王寺に居られた法然上人を尋ねたことがあります。その光景が勅修御傳第十六に出て居ますから、次に掲げます。

『僧都さし入りて未だ居直らぬ程に、この度如何して生死を離れ候べきと申されければ、南無阿彌陀佛と唱へて往生を遂ぐるには如かずとこそ存じ候へと仰せられければ、僧都申さるゝ樣、誰れもさは見及び侍り、但し、念佛の時心散亂し、妄念の起こり候を

ば、如何かして候べきと。上人宣はく、慾界の散地に生を受くるもの、心豈散亂せざらんや。煩惱具足の凡夫、いかでか妄念を止むべき。その條は源空も力及び候はず。心は散り亂れ、妄念はきほひ起こると雖も、口に名號を唱へなば、彌陀の願力に乘じて、決定往生すべしと申されければ、これ承はり候はん爲めに、參りて候ひつるなりとて、僧都やがて退出給ひければ、初對面の人、一言も世間の禮儀の詞なくして、退出せられぬることよとて、人々尊びあひけり。さて上人内へ入り給ひて、心を靜め、妄念起こさずして、念佛せんと思はんは、生れつきの目鼻を取り放ちて、念佛せんと思はんが如し。あなことゝしとぞ仰せられける。』

これによりますと、念佛は妄念を去る爲めのものでないといふこ

とになります。他力門の立場からは、かういひたいのでありませうが、何もさう拘泥する必要はありません。如何に極端な人々でも『妄念は起こり次第、邪念は生ずるがまゝ放任して差支ない。只口の中で機械的に上の空で唱へて居ればよい。彌陀は必ず極樂淨土へ往生さしてくれる。』とは申しますまい。若しさうであつたとして、その思想を推し擴め、『人は慾念の塊だから、慾念の赴く通り、姦淫しようが、偸盜しようが、人殺ししようが一向かまはない。念佛さへ唱へて居れば、極樂往生疑ひなし。』といふことになつたら大變でありませう。何の爲めの宗教だか分からなくなつて參ります。現に信者と稱するものの中に、こんな誤解をして居るものもある樣であります。他力門の人々は大に警戒しなければなるまいと思ひます。それですから、この念佛の上に『深く信じて』といふことを附け加

へなければならないのであります。深く信ずるといふことは心を分散させないといふことであります。心が分散する間は深く信じたのではありません。彌陀佛を心中に體驗して全くそれと融合し、それを具體化して御覽なさい。妄念などの起こるものではありません。信ずるといふのは、こゝまで行かなければ本當に信じたのではありません。實在の統一性は常にこの融合統一を要求して居るのであります。それを法然上人は『心を靜め、妄念起こさずして念佛せんと思はんは、生れつきの目鼻を取り放ちて念佛せんと思はんが如し。』といはれたのは、勿論臨機の善巧方便であつたらうと思ひますが、餘りに極端な言ひ方で、天下後世に誤解者を出す言ひ過ぎと思ひます。私などは誠に非根な人間でありますが、實際妄念を斬り掃つて、全くそれの起こらない迄日々經驗して居るのでありますから、出來

ないなどといふことは斷じてありません。こゝは他力門の人々に是非々々他力といふ二字に捉はれない樣にお願ひします。一大事の爲めには他力も自力もないではありませんか。動かすべからざる眞理に從ふのが本旨ではありませんか。

右の樣な譯合ですから、心の散亂しない樣に念佛するといふことと、信じて念佛するといふことは、言葉が違つて意味は同一であります。卽ち精進的統一をやつて居るのであります。『妄念の起こるのは凡夫の證據だ。彌陀の本願によりすがる外はない。』と專念に名號を唱へる人は、實際一所懸命に精進して居るのであります。これを否定する人々は、本當に信仰の何ものたるか、體驗の何ものたるを知らない人達と思ひます。かういふ風にして、念々相續の念佛と

なり、惱みなしに精進が出來れば、これが卽ち彌陀であります。實在の流れと合同したのであります。かういふ念佛は最早方便ではありません。人間の生活そのもので、我れ〳〵の目的でなければなりません。淨土門の人々が、念佛は最高の德行だといふのは、これを指すのだと思ひます。

併し、どう考へて見ても、念佛は自己統一にしかなりません。人はその職業に社交に他の生活をもしなければならないものであります。この方の統一をもはからなければなりません。淨土門の人々は、『念佛の中に職業に從事し、念佛の中に社交をして行くのだ。』と申すのでありませうが、職業に融合し、他人と融合して行くことが、直ちに念佛だとはいはれません。念佛に精進する心を以て、そ

れ等にも精進するといふことにしかならないと思ひます。さうすれば、共通して居るのは精進であつて、念佛ではありません。そして體驗導入の目標は何でも差支ないのが原則であつて見れば、何もかも念佛に持つて行かなければならない譯はあるまいと思ひます。念佛のみを高調して居ると、動もすれば後生安樂ばかりを望む老爺老婆の慾得信仰となり、人間の實生活に甚だ緣遠いものになりはしないかと危ぶむのであります。宗敎は人間の生活そのものでない限り、一種の徒らごとであります。

それはとにかく、『極樂往生は、現世では出來ないもの、來世に於て始めて現前する。』といふ考は、意味深長であります。前にもいつた通り、實在の大統一大完成といふことは一種の理想で、それの實

現する期はないのであります。隨つて極樂を實在の大統一大完成と見れば、現世に實現しないことは勿論であります。否現世どころか、何時までたつても實現しないのが本當であります。けれどもその極樂といふのを『實在の惱みのない精進』と見れば、現世に於ても或る程度までは實現することが出來ます。我れ〳〵の精進と實在の精進との相違は、實在は常に惱みのない精進でありますが、我れ〳〵人間の精進は、その初めに當つて、若干の苦惱煩悶を伴ふといふ點にあります。念佛修行者が、彌陀の本願力にたよれ〳〵と勸められても、それにたより切れない間の苦惱が、卽ち人間精進の苦惱であります。して見ると、第二の意味の極樂でも、現世に於ては、全部を實現することは出來ないといふのが、本當かも知れません。

何れにもせよ、自力とか他力とかいふのは大體の區分で、眞の宗教の眞諦に徹しようとするものには、無用の分類であります。

淨土門の行には、讀誦、觀察、禮拜、唱名、讃嘆供養の五種あるといひますが、私は唱名以外のことは、能く承知しませんから、それ等の論評は今此處ですることが出來ません。

禪の方便は

聖道門には澤山の宗派を包含して居ますが、禪宗は自力門として、は最も徹底したものであり、又傳統的形式から蟬脫した點に於て、特異の長所を持つて居ますから、他を省略して特にこの宗の方便を

考察して見ることにします。禪宗の内でも、多少その方便に相違があつて、幾つかの流派があるさうでありますが、今は大體について論評いたします。

禪の修行には看話と坐禪の二つがあります。看話といふのは、師家が問題を出して考へさせるので、その問題を公案といつて居ます。坐禪といふのは、靜かな處に默々として打坐するので、自己統一が目的であります。

公案には法身、機關、言詮、難透の四種類があるといひますが、その主なるものは法身で、その他はそれを精細に研究するだけであります。法身といふのは、物我未剖以前の實在の眞景を指すので、

卽ち體驗界のことであります。體驗界は各自の直接經驗によつて自得するより外仕方なく、說明傳達の出來ないものであるが爲めでありませう。禪の修行では殆んど說明を加へず、直ちに公案を與へて、それを考へさせます。例へば『父母未生以前の我れ。』とか、『隻手の聲。』とかいふ類の公案を出して考へさせるのであります。これ等はそれ自身が、既に法身を指して居るのでありますから、初步の人が如何に考へたとて、分かる筈はありません。それで『分からない。』といへば、『分かるまで考へろ。或は五年。或は十年。或は一生。』といつて、決して敎へてやらないのであります。根氣の弱い連中は驚いて逃げ出してしまひますが、負け嫌ひの連中は、なに畏るといふ氣になつて一心不亂に考へるのであります。つまり勇猛精進をやるのであります。その間にも、師家は或は棒を行じ、或は喝を行じて、飽

くまで修行者を窮地に陷れるのであります。修行者が無我夢中になつて考へて居ると、考へるといふよりは寧ろ念じて居ると、たうとう己れとその公案とが融合して、己れが公案か、公案が己れか、無何有の郷にはいつてしまふのであります。そこで師家は『それ、そこが父母未生以前の我れだ。』『それが隻手の聲だ。』と指示するのであります。大抵の修行者は『何だ、これが佛法の歸着點か。』と悟つて、臨濟ではないが、『黄檗の佛法多子なし。』と叫ぶのであります。卽ち極度まで修行者を窮地に擠して、純一無雜の本眞劍とならしめ、そして物我一如の眞景卽ち法身を見させるのであります。黄檗運禪師の說示を見れば、それが最も明瞭であります。

爾兄弟家に勸む。色力康健の時を趁うて、箇の分曉を討取せよ。

這些の關榾子、甚だ是れ容易なり。自ら是れ爾死志を下して工夫をなすことを肯じ去らず。只管に難了又難と道ふ。若し是の大丈夫漢ならば、箇の公案を看よ。

僧趙州に問ふ。狗子に還つて佛性ありや也た無しやと。州云ふ無と。

但二六時中箇の無字を看て、晝參夜參、行住坐臥、著衣喫飯、屙屎放尿の處、心々相顧み、猛に精彩を着して、箇の無字を守れ。日久しく歳深うして、打成一片とならば、忽然として心華頓に發きて、佛祖の機を悟らん。便ち天下の老和尚の舌頭に瞞せられず。

死に物狂ひとなつて無の一字を念じ、晝も夜も、寢ても起きても、立つても坐つても、飯を食ふ時でも便所へ入つた時でも、見るもの

聞くもの悉く無の字になる迄念じ拔け、何年かの後には、己れと無字とが打成一片となつて、實在の風光が現前するであらうといふのであります。一度この境に到達すれば、なるほど時間もない空間もない、我もない物もない、しかも孤明歷然として疑ふことは出來ないのであります。

これでもうよいかといふと、仲々宥しません。今度は絕對界、相對界交互錯綜の問題を出して、時空二間の束縛より全く解脫させようとはかるのであります。當に問題でせめる許りでなく、日常の生活にまで蹈みこんで、寸時も油斷のない樣に鍛へあげるのであります。次にそれ等の二三例を擧げます。

1 富士の山を袂に入れて見よ。

2 手を濡さないで海底の貝を拾つて來い。

3 向岸の喧嘩を止めて見よ。

4 懷州の牛禾を喫すれば益州の馬腹脹る。

5 一老宿ありて師に參ず。未だ曾つて入室せず。便ち問ふ。禮拜せんが卽ち是か。禮拜せざらんが卽ち是か。師便ち喝す。老宿便ち禮拜す。師云はく、好箇の草賊と。老宿賊々と云つて便ち出で去る。師云はく、道ふことなかれ、無事にして好しと。首座侍立する次で、師云はく、還つて過ち有りや也た無しや。首座云はく、有り。師云はく、賓家に過ち有りや、主家に過ち有りや。首座云はく、二たり俱に過ち有り。師云はく、過ち什麼の處にか有る。首座便ち出て去る。師云はく、道ふことなかれ無事にして好しと。後に僧有り南泉に擧似す。南泉云はく、官馬

相蹈む。

先づこんな風であります。側から見れば、まるで謎の掛け合ひの様で、とんと意味の分からないものであります。けれども至極眞面目でやるのでありますから面白いのであります。最後の一則は、臨濟語錄の勘辨篇に出て居るものでありますが、試みに私の見識を以て解釋して見ます。元來普通の人は事物を解釋するのに、直ぐに物心二元界に走つて理知で判斷しようとしますが、禪では理知の束縛から脫して、知情意の統合した物我一如の狀態で判斷しようとするのであります。このことを承知して右の問題を顧みると、さほど難かしいものではありません。先づ言葉の意味から申しあげます。

一人の坊さんが臨濟老師に參禪した。別にお辭儀もしないで、いきなり、『お辭儀をしたものでせうか、しないものでせうか。』と尋ねた。すると臨濟は『喝』とやつた。そこで老僧は恭しくお辭儀をした。臨濟は『このこそ〳〵泥棒奴。』といつた。坊さんは『ハイ泥棒でござります。』といつて出て行つてしまつた。臨濟は『捉まへられないで仕合せだと思へ。』といつた。時に上席の門弟が側に居たので、臨濟は、『どうだ、今の問答にどこか惡い所はなかつたか。』と尋ねた。すると門弟は、『エヽ有るどころぢやございません。』と答へた。臨濟は、『俺が惡かつたか、彼れが惡かつたか。』と尋ねた。門弟は『お二人とも惡い。』と答へた。臨濟は、『どこが惡い。』と尋ねた。門弟は默つて出で行つてしまつた。すると臨濟は、『巧く逃げおふせたと思ふと違ふぞ。』といつた。後に或る坊さんが、

この問答を南泉和尚に話して聞かした。南泉和尚は、『どとらも立派な馬だ。負け勝ちはないぞといつた。』

言葉の意味はこれだけて、理知で穿鑿しては一向譯が分かりませんが、これを物心一如の心で見て行きますと、次の様になつて參ります。

老宿が臨濟に、『お辭儀をしたものか、しないものか。』と尋ねたのは、老宿の方から臨濟をためしたので、臨濟老師を物心二元界へ引き出して、善惡正邪等の相對的答話を釣り出さうと謀つたのであります。大小大の臨濟、すぐその意を悟つて、『喝』とやつたのであります。二元に亘らない答話は喝より外ないのであります。無論この喝の中には『此奴が。』といふ叱つた意味もあり、又探竿

影草といつて先方に探りを入れて見る意味もあるのであります。物心一如の行動には色々の意味が包含されて居るのが常であります。そこで老宿は、『よく分かりました。有りがたうございます。』といつてお辭儀をしたのであります。このお辭儀は前にいつた挨拶のお辭儀ではありません。敎訓を拜謝するお辭儀であります。老宿の行動が如何にもきびしして落度がないので、臨濟は『此奴、俺をためしに來をつたな。人の懷中をねらふ掏摸の様な奴だ。』といつたのであります。これは老宿を貶した様に聞こえますが、決して貶したのではありません。寧ろ褒めたのであります。禪ではよくかういふことがあります。これは、一つには褒貶一如の考から、一つには修行者の緊張を益々强からしめる考からするのであります。すると老宿は『その通り〳〵。』といつて出て行つてし

まつた。少しも凝滯するところのない行動は餘程修行の積んだ坊さんに違ありません。そこで臨濟は『取つつかまへられないで仕合せと思へ。』と、どこまでも修行者に油斷をさせまい教訓をしたのであります。丁度その時側に門弟の一人が居たので、今度はそれを教訓しにかゝりました。『どうだ、今の問答にどこか惡い處はなかつたか。』と、物心二元界へ釣り出しにかゝつて來ました。門弟もさるもの、『ありますとも〳〵。』と答へた。然らば『俺が惡いか彼れが惡いか。』と、又々二元界へ引張り出さうとする。『お二人とも惡い。』と、仲々その手に乘らない。『惡いといふは何處だ。サアいへ〳〵。』と攻め寄せて來る。『そんなに攻めて來てもその手には乘りません。』とサッサと出て行つてしまつた。到頭臨濟の係蹄にかゝらなかつたのであります。そこで臨濟『手傷を負はなかつ

たと思つて油斷をするなよ。』と教訓したのであります。この門弟も餘程修行を積んだものに相違ありません。南泉老和尚が、『どちらも立派だ。負け勝ちはない。』と評したのも尤と思ひます。

禪の問答といふのは大抵こんなもので、別にむづかしいものでも何でもありません。つまり、いつでも精進的統一をやつて居て、氣を弛めさせない爲めの修行であります。人は一度統一の絶對界にはいれば、それでよいといふものではありません。いつでもその統一は分裂するのでありますから、それを又統一し統一して行かなければなりません。卽ち不斷の精進てなければならないのであります。一生涯精進しなければならないのであります。精進は生命で、精進の止む處に死が來るのであります。禪で修證不二といふのは、修行

それ自身が人間の生活であるから、一生涯精進を續けよといふ意味であります。この意味に於て、禪の修業は頗る要を得たものといつて差支ありません。

次に坐禪のことを簡略に述べて見ます。坐禪のことは道元禪師の普勸坐禪義や、佛慈禪師の坐禪用心記に詳しく說明してありますが、靜室に端坐して、體を調へ、氣息を平にし、最奧の自己を返照して居ると、終に身心脫落して、無我無物の境に入り、實在の面目がそこに現前するといふのであります。つまり自己統一法で、他に意味はありません。

禪の方便は大略右の樣なもので、他の宗派に於けるが如く、別に

歸嚮の本尊を立てるでもなく、又所依の經典があるでもなく、常に殺佛殺祖を叫び、佛典を黃卷赤軸と貶して居るなど、傳統的の奬竇を蟬脫して居る點に於て、この宗派の樣なものは他にありません。これならば理知の進んだ人々も、方便的臭味を感ずることなく、進入することが出來ようかと思ひます。けれども初入の人を導く方法などは、やはり禪一流の形式が成立して、甚だ面白くないと思ひます。あんなことをせずとも、體驗に入らせる道はいくらでもあります。元來人間一切の行動は、皆體驗によつて伸展するものでありますから、自己の經驗を反省させれば、體驗の經驗ないものは決してないのであります。よくその事實を指示し、體驗成立の方法を會得させれば、何人でも直ぐに體驗に入ることが出來るのであります。それを謎の樣な公案に沒頭させ、或は五年或は十年、拂拳棒喝の攻

道具を使つて修行させなければならないといふ理由は斷じてありません。これは畢竟その道の人々が、本當に體驗の性質を知らないからであります。坐禪もその通りであります。自己統一の體驗が何も靜室兀坐に限つたことはありません。體驗の性質さへ知つて居れば、何事に對しても出來るのであります。この批難に對して、禪宗の人々は、『それはその通りである。現に道元禪師も坐禪は豈坐臥に拘はらんやといひ、又六祖壇經にも、外一切善惡の境界に於て、心念起らざるを名づけて坐となすといつて居る通り、平生の行動悉く禪であるべき筈だ。』といふのでありませうが、事實はその通りに行つて居りません。禪僧といふと、多くは出世間的獨善的であつて、名僧知識といはれた人々でも、基督の如く釋迦の如く、丸裸で俗界の濁流に投じ、衆生濟度に一身を捧げた大宗教家は殆んどないのであります。そして公案や坐禪の閑葛藤、閑兀坐に沒頭して居るのであります。公案や坐禪がよし自己統一の方便として有效であつたとしても、今日の樣な劇甚な生活をしなければならない時代にあつては、宜しくそれを棄てゝ實生活に卽した方便を案出すべきではありますまいか。さうでなかつたならば禪卽生活といふ理想は全く空想で、事實には行はれないことになりうと思ひます。言行不一致は實に禪の賊であります。私は禪僧諸氏が速かに玆に目覺め、何ものにも捉はれざる眞諦を發揮し、大勇猛心を振ひ起こして時代の潮流に飛び込み、身を以て衆生を率ゐらるゝことを切望するものであります。

基督教の方便は

基督教は、唯一眞神を本尊とし、祈禱といふ方便によつて、それに融合一致せしめる宗教であります。この唯一眞神卽ち天の父は、淨土佛教の彌陀であり、禪の本來の面目卽ち法身であり、又私の謂はゆる實在であることは明かであります。そしてその祈禱といふのは、淨土佛教の唱名念佛、禪の坐禪看話、私の謂はゆる精進であることも疑ふ餘地がありません。つまり同一物の異名で、丁度同じ禾本科の或る植物を、浪速では蘆といひ、伊勢では濱荻といひ、植物學上ではフラグミテス、コムムニスといふ樣なものであります。所が宗教家はその名目の相違を見て實質まで違つて居るかの樣に考へ、互に反目嫉視して居る樣でありますが、誠に淺ましいことと思ひま

す。名目などはどうでもよいではありませんか。同じ名にするのが便宜だといふなら、お互に話し合つて改めるまでであります。元々人爲的のものでありますから、改めたつて何の差支もないのであります。それよりは宗教本來の性質に顧み、惱みに惱んで居る今日の衆生を苦海より拯ひ出すことが、何を措いてもしなければならない最先の急務と思ひますが、間違てせうか。

基督教の祈禱について、聖書に

汝等祈る時に、僞善者の如くすることなかれ。彼れ等は人に見られんが爲めに、會堂や、街衢の隅に立ちて祈ることを好む。我れ誠に汝等に告げん。彼れ等は既にその報いを得たり。汝祈る時は、密かなる室に入り、戸を閉ぢて隱れたるに在ます汝の父に祈

れ。さらば、隠れたるに視給ふ汝の父は、顯はに報い給ふべし。汝等祈る時は、異邦人の如く、繰り返し言をいふ勿れ。彼れ等は言葉多きを以て聽かれんと思へり。この故に彼れ等に倣ふこと勿れ。汝等の父は願はざる先に、そのなくてはならぬものを知り給へばなり。されば汝等かく祈るべし。『天に在ます我れ等の父よ。願くは御名を崇めさせ給へ。我れ等の日用の糧を今日も與へ給へ。我れ等に罪を犯す者を我が宥す如く、我れ等の罪をも宥し給へ。我れ等を試みに遇はせず、惡より拯ひ出し給へ。國と力と榮は、汝の窮りなく有ち給ふ所なり。アーメン。』汝等若し人の罪を宥さば、汝等の父も亦汝等の罪を宥し給はん。

と記してあります。適當な注意と思ひます。(實在を客觀的人格者と見た獘は淨土佛教と同樣であります。)祈禱は固より最も純眞なる心

を以てしなければなりません。他人に誇示するが如きは勿論無意味であります。不純の心、妄念雜念を拂ひ去つて、誠心誠意の限りを盡し、祈禱三昧に入つた時、始めて神を見ることが出來るのであります。して見ると祈禱は卽ち精進であります。淨土門の念佛も、禪の坐禪看話も、何も違つたことはありません。そして精進は、初めは苦しいが、漸次に惱みのない精進に化するのでありますから、懈怠してはなりません。繼續して行ふべきであります。これは、基督が『異邦人の如く繰り返し言をいふ勿れ。』といふのと、矛盾して居る樣に聞こえますが、決してさうではありません。基督は只誠意のない、機械的の祈禱を戒めたのでありまして、誠意の籠つた祈禱ならば、如何ほど繰り返しても差支ない譯であります。基督教のイムマヌエルといふは『神我れと共に在ます。』といふ意味だといふでは

ありませんか。神が何時でも我れと一緒に在ます様にするには（卽ち神と我れと融合一致する様にするには）、神の御名を斷えず念じて居るのがよいてはありませんか。篤信家は聲に出さないでも必ずさうして居るだらうと思ひます。これは一種の唱名念佛ではないのでせうか。とかく文字言語の末に拘泥して居ると、かういふ間違を惹き起こすのであります。

要するに基督教と佛教の淨土門とは、符節を合する様に似て居ます。聖道門の佛教もその眞精神に至つては少しも違つて居りません。その外觀が違つた様に見えるのは、その生長した土地の相違で、枝葉末節が違ふだけてあります。それですから私は斷言します。

『宗教は精進によつて實在に融合することを圖るものである。』

と。精進は初めの間は苦惱を伴ひますが、それを繼續して居れば、終には惱みのない精進になります。その惱みのない精進が實在の眞景でありますから、精進を離れて宗教は考へられません。否精進は人生の全部であります。嗚呼精進よ。精進よ。その他の枝葉末節はどうでもよいのであります。宗教家が茲は目覺めない限り、時代に相應した教化は斷じて出來ないと思ひます。

熟々世界人心の趨く所を察するに、只管理知に偏して知情意統合の何物たるかを知らず、小なる理知を以て無限の實在を測り得るかの様に思惟し、一擧手一投足も實在の流れに隨ふにあらざればなし得ないものといふことに氣づかず、相率ゐて滔々として苦惱煩悶の淵に急いで居ます。今日の人心の不安動搖は實に前古未曾有といつ

ても差支ないのであります。宗教家諸氏は無論この傷ましい世相を視て居るでありませう。視たとしたならば、是非猛然と起つてこれが救濟に從事して戴きたいのであります。社會人類を體驗しそれの利害休戚を己れの利害休戚とまでする人々ならば、現時の世相を視て奮起しない道理はありません。それでも尙躊躇逡巡して居るものとすれば、恐らく諸氏はまだ社會人類を體驗して居ないのであります。自利私慾の殼がまだ諸氏の身を包んで居るのであります。社會人類を濟度しようとする宗教家にして、身自ら社會人類を體驗しないとすれば、それは宗教家でありません。却つて拯はるべき憐れな衆生であるのであります。私は基督の如く、釋迦の如く、全く全人類を體驗し、融合した大宗教家の現出を祈つて止まない者であります。手段方法の如きは、斯る大宗教家の足跡を尋ねて、後世人の發

見すべきものであります。前から豫定計畫すべきものではありません。況んやそれの爭論唾み合ひなどは以ての外であります。

私が教育の任に膺れば

教育の本質は前に論じた通り、宗教と同じことであります。隨つて宗教の手段方法は、直ちに教育の手段方法でなければなりません。ところがこれ迄の教育者は偏へに理知の穿鑿だけで教育が出來る樣に心得、宗教の手段方法などを攝入することを嫌つて居ました。よく口には知情意の調和發達とか、德性の涵養とかいふことをいひますが、どうして知情意を調和發達せるか、どうして德性を涵養するかといへば、その答は甚だ空疎なものであります。多くは例の盲目

的感情を理知の判斷で導かせ、それを意志で決行させるなどといつて居るのであります。これは丁度大工が、色々の材木を集めて來て、それを切つたり削つたりして家屋を構造する樣なもので、それで知情意が有機的に調和するものでもなく、德性が完成するものでもありません。知情意の調和、德性の完成が、そんな人爲的方便で出來るものと考へたら大間違であります。精神本然の性質に立ち歸つて、それ自らの統一性、發展性に賴らない限り、一足でも前へ進むものではありません。それに賴りさへすれば、知情意は求めずして調和統一し、德性は法爾自然に完成せられるのであります。精神本然の性質に立ち歸るといふことは、卽ち體驗するといふことであります。それですから教育は體驗を離れて成立しないのであります。勿論理知の發達も、體驗の內容を豐富にする爲め必要ではありますが、そ

の理知の伸展も體驗によつて行はれるのだといふことを忘れてはなりません。それ故教育は被教育者を體驗へ導くが專一であります。

教育の手段方法とは申しますが、それを使用するのは教育者であります。隨つて、教育者がそれの使用に堪へるだけの資格を持つて居なければならないことは申す迄もありません。少し極端にいへば、教育者さへ本當のものであれば、手段方法の如きは、その人に任せて置いてよいのであります。教育者が教育そのものを體驗し、教育者の本然の精神が活躍して來れば、手段方法の如きは、淫々として流れ出でて、盡くる所がないのであります。それですから、參考の爲め色々な方法手段を聽くことは、その者の體驗內容を豐富にする所以で、決して惡いことはないと思ひますが、先づ教育者を體驗者

となさしめることから始めなければなりません。

教育の對象は社會人類、國家民衆であります。隨つて社會人類、國家民衆を體驗しなければなりません。換言すれば、社會人類、國家民衆と教育者とは、全く融合一致して、社會人類の喜憂、國家民衆の休戚が、直ちに教育者の喜憂休戚と化し、教育者自己の利害得喪などは全然忘却し去るまでにならなければならないのであります。それには常に社會國家と接觸し、念々それを離れない樣にすること、例へば基督教信者が日々の祈禱によつて天父と共に住することを圖るが知く、念佛行者が二六時中口に念佛を絶たざるか如くしなくてはなりません。この勇猛精進が、漸次教育者の資格を作つて行くのであります。隨つて本當の教育者は師範學校數年の修行位で出來る

ものではありません。實に一生涯の修行であります。併し、本眞劍に精進すれば、惱みのない精進に入ること位はさほど難かしいものとは思はれません。若し自分自身にそれになつたかならないかを檢證しようと思ふならば、己れは常に己れの利害得喪を忘れて居るか居ないかを反省して見れば分かります。

私は說明を具體的にする爲め、私自身が一農村の小學校教育の任に膺つたとして、私の考を述べて見ます。

私は兒童の教育を如何にすべきかを考へる前に、先づその農村を體驗することに努力します。私は次の樣なことを知悉することから始めます。

一、その村の農民の生活狀態はどうてあるか、團體としての財政狀態はどうてあるか。業務の營み方はどうであるか。交通、衛生の狀態はどうであるか。窮民の有樣はどうであるか。

一、風俗慣習はどうてあるか。精神的娛樂はどうであるか。惱みの有樣はどうであるか。知識の程度はどうてあるか。道德の程度はどうであるか。

こんなことから、その村一切の生活狀態を調べて、終には、どこの家にはどんな病人が居る。何某は勤勉てあるが、何某は怠け者である。どこの巷にはどんな草が生へて居る。どこの道路にはどんな水溜りがあるまで知る樣に努めようと思ひます。知つたが最期それ等紛然雜然たる狀態を如何にかして調和し統一しようと思ふのは人性の本然でありますから、私とてもその村の一家一家が睦しく、一村

全部が融和して、お互に幸福に安易に生活する樣にしたい心が當然起こるものと思ひます。それで私は、そちこちの家庭を訪問して、惱める者に心からの慰めを與へ、病める者に僞はらざる同情を表し、道路の凸凹は自ら鋤を取つて平かにし、或は道端の犬の糞を掃除し、或は荷車の後を押してやり、村の爲め村民の爲めとあらば、自分の力のあらん限りを盡します。若し、村の財政の苦しいことが事實であれば、己れの俸給の幾分をも辭退します。自分は粗衣粗食に滿足します。無論かういふことをするのは可なりの勞苦でありますから、初めの内は有意的、克己的にやるより外仕方がありません。けれども勇猛心を奮ひ起こして精進すれば、この位のことの出來ない道理はありません。こゝが精進のしどころだと己れを鞭撻してやります。暫らく繼續して居れば、最初はその心中を疑つて居た村民でも、誠

意の行動には必ず動くに相違ありません。一人感激し、二人共鳴して來れば、己れにも興味が湧き、日一日とその村と融合の度を加へて來ます。その機會を逸せず勇猛精進して居れば、終には全く融合が出來ようと思ひます。

學校の教育が本當に行はれるのは、これからであります。私の心が本當にその村民を經濟的社交的精神的の惱みから拯ひ出さうといふことに統一して來れば、兒童は第二の村民でありますから、如何にもしてこれ等兒童を立派な村民に仕立て、一日も早くそれ等のことに盡瘁させようと思ふに相違ありません。吉田松陰が十歳位の幼童に對しても國家の大事を說いたと同樣に、私は村及び村民の幸福の爲めに、涙を揮つて兒童を激勵するにきまつて居ます。誠心の迸

るところ、熱火の燃ゆるところ、如何なる頑童でも、感化されないものはないと信じます。教育の手段方法などは求めずして出て來ます。そして必ず肯綮に中ります。

私は主義として兒童に勇猛精進を勸めます。學業にも、家業にも、父母兄弟にも、朋友にも、村民にも融合一致する樣勇猛精進を極力勸めます。己れ範を垂れての勸告ですから、彼れ等も必ず努めるに相違ありません。學業は益々發達します。父母には孝、兄弟姉妹には友、朋友には信、そして村民に對しては博愛仁慈の兒童となるに相違ありません。父兄は益々感謝の念を起こすに相違ありません。村民は愈々信用の度を高めるに相違ありません。併し私はそんな感謝や信用を得んが爲めにして居るのではありませんから、私の體驗

生活がこれだけに止まることはないと思ひます。無論これから先は實在の流れが、私を法爾自然に動かすのでありまして、豫定は勿論出來ませんが、次の様なことになるではないかと思ひます。

私は各戸について精密なる財産狀態を調べます。そしてその家族と協議して、次の一年間に、如何にして負債を償却し、資産を增加すべきかを定めます。そして必成を期してその豫定を實現すべきことを勸めます。翌年度の終りに決算を行ひ、その成績を案じて次年度の豫算を立てさせ、年々これを繼續させます。又村全體としては、共有財産增殖の道を立て、村民擧つてこれに協力する様に勸めます。用水池に鯉兒を放つてこれを飼養するとか、河川の堤防に楮を植ゑて年々製紙原料として賣るとか、荒蕪せる澤地に杞柳を植ゑるとか、

官有林野を拂下げて殖林するとか、その土地の模様によつて共有財産を作る方法は殆んど無限にあると思ひます。村民の融合さへ出來れば、二三十年の間に百萬圓の財産を作ることは決して難事でないと思ひます。

私は又學校兒童や青年に勸めて通路の修繕をさせたり、害虫の驅除をさせたり、村民に良種の購入をさせたり、肥料蠶種農具の共同購入をさせたり、生産物の共同販賣をさせたり、消費組合を作らせたり、信用組合を作らせたり、有利の副業を勸めたり、有ると有らゆる有利の考案を實行いたさせます。

右は主として經濟方面の仕事でありますが、この他に精神の修養、衛生體育の勵行等にも極度の力を用ひます。こんなことは自慾の殻

に立ち籠つて居るものには出來ることではありません。又村民もいふことを聞かないにきまつて居ます。けれどもその村及びその村民を體驗して、村の爲め村民の爲めとあらば、何時でも一命を差出す覺悟を持つて居る者に於いては、何でもない仕事であります。この勇猛精進こそ實に教育者の生命であります。教育者として天堂極樂に入る道は只この一道ある許りであります。

村民は一面に於て國民であります。學校としては兒童を村民たる外に國家の一員として養成しなければなりません。併し、村民としての良民は、直ちに國家の良民であります。國家は地方一村一邑の改善から着手して行かなければ、到底健全なる發達は遂げられないと思ひます。空漠たる國家政策を云々するよりは、一村一邑の改善

に努力する方が、現時の帝國として、どれほど有效だか分かりません。

右は私が若しも小學校師として就任したならばといふ抱負でありますが、中學校、高等女學校、專門學校、大學等の教師としての抱負も相當にあります。殊に近時の高等諸學校が、只收容人員の多數を貪るだけで、少しも人間の訓育に心を用ひない狀態に對しては、私は非常な憂慮を抱いて居るものであります。私の狹い見聞でも、あの中にどれほどの墮落學生、不良學生が居るか分からない位であります。あんな粗製濫造は獨り當人の不幸ばかりでなく、益々社會國家の不安動搖を釀成する所以で、決して教育の本旨でないと思ひます。それにしても私は、體驗的教育家の缺乏に對して、長大息を

禁じ得ないものであります。

教育の手段方法を少しばかり

右の様に教育の根本問題だけを論じたのでは、その道の人に餘りに不深切の様でありますから、少しばかり教育の手段方法を述べて見ます。これとても固より疎枝大葉でありますので、細かい所は教育家諸氏が、實地經驗によつてきめてもらふ外はありません。

一、被教育者を體驗に導くには、子供の時から學科でも作業でも運動でも、生眞面目に、熱心に、一所懸命にする習慣を養ふことが大切であります。子供は天眞爛漫ですから、自分の好きなことなど

には、直ぐ體驗狀態となるものでありますが、一方嫌ひなものなどになると、それをすることが厭なばかりでなく、させてもちよつと困難にあふと、他の興味あるものに移りたがるものであります。さういふ時でも、子供は子供なりに辛抱させて、段々それを體驗する迄導いてやらなければなりません。體驗の味を一度嘗めると、子供でも繼續してやりたくなるのが自然であります。子供の好きなもの〳〵と題目をかへて行く樣な教育は大層有害であります。そんなにして生長した子供は、將來社會へ出てから何も出來ません。社會には好きなもの許りはありません。否、どんなことでも苦痛を伴はないものはないのであります。時には病氣災難など避け難い苦痛にも遭遇するのであります。そんな場合でも、與へられた題目に精進して行けば、必ず自由無礙の樂地を得るのでありますから、題目の好

き嫌ひに執着する習慣は、決してつけない様にすべきであります。榮耀榮華の家庭に生れて我儘の限りを盡した子供に、ろくな人間の出來ないのはこの爲めであります。さりとて無理難題ばかりで責め拔くのは、飯の代りに石を喰はせる様なもので、無論有害であります。禪の公案教育などは大人でも逃げ出す位であります。何れにしても、教師が本當の體驗者であれば、子供に少し許りの辛抱をさせるのは、決して難事でありません。

二、知的學科でも、一歩々々體驗しつゝ進ませなければなりません。卽ち一段の教授がすめば、それが子供の心の中に一つの具體的なものとなつて現はれる様にしてからでなければ、次へ進んではなりません。若しそれを躍進すると、子供には本當の諒解が出來ないのでありますから、それから先の教授は殆んど無効になつてしまひます。到頭子供をその學科の嫌ひなものに仕上げてしまふのであります。數學の嫌ひな子供などは、大抵はこの躍進の結果から生ずるものであります。

三、子供が體驗に入りかゝつた時は、事情の許す限り、その腰を折らない様にしたいものであります。例へば、今が肝腎といふ時に、豫定の時間になつたからといつて、それを中絶させるなどは大變な損失であります。こんな時は、それを繼續させる位の臨機の處置はしたいものと思ひます。

四、家族朋友などとよく融合する様に導かなければなりません。

初めの間は己れの慾を捨てさせるのに、可なり骨が折れるであらうと思ひますが、これは是非勵行の必要があります。稍成長すれば一層廣い社會と融合させべきてあります。融合を中途半端てよしてしまふと、僞善者を作ることになりますので、これだけは本當の融合にまで、徹底させたいと思ひます。これを徹底させる唯一の手段は、教師それ自身の實踐躬行てあります。

五、少し成長して來て、物の理解がつく樣になつたならば、勇猛精進の大切なこと、人生卽勇猛精進だといふことを、常に說示して諒解させて置く必要があります。

六、場合によつては、自己統一をさせてもよいでせう。南無精進、

南無精進人、若くはそれに類似した適當の言葉を與へて、それを念佛する樣に一心に唱へさせても、又は時を定めて靜坐默念させても宜しからうと思ひます。

以上の方法を本當に實行するには、餘程教育者の自由裁量に任かせなければなりません。何から何まで規則攻めでは駄目だと思ひます。元來活きた教育をするのに、死んだ規則で縛るなどは間違つて居ます。所が規則で縛らなければ教師が忘けるといふのでは問題になりません。中學上級以上の教育は、本當に勇猛精進をさせられようと思ひますから、玆には別に述べません。

尙序に一言しますが、色々新規な教育說が出て、教育者はその取

捨選擇に迷ふと聞いて居ます。併し、迷ふも迷はないもないではありませんか。自分が體驗した事實ほど確かなものはないではありませんか。それですから、新學說を參考するのはよいとしても、その取捨選擇に苦しむなどといふことのあるべき筈はありません。それに苦しむ間は、まだ體驗が成り立つて居ないのであります。人の說に苦しむよりは自ら體驗する方が先であります。體驗もしない抽象概念に左右せられて居る教育者ほど、憐れなものはありません。これ等は教育者ではなく、寧ろ教育せらるべきものであります。

第五篇

或る社會主義者へ

『あなたの新宗教と社會主義との關係はどうであるか。』との御質問に對して御答へいたします。實をいふと私は社會主義といふものをよく承知いたしません。それ故已むを得ず私の貧弱な知識を基礎として意見を草しました。深い造詣のあるあなたから見れば、定めて物足らなく感ぜられるであらうと思ひますが、それは豫め御諒察を願ひます。

マルクスあたりの思想は大略次の様なものと思ひますが、違つて居せうか。

一、人類の歴史には如何なる時代にも、何かの意味の階級の對立があつた。その階級は互に闘爭を續けて來た。闘爭の原因は利害の衝突である。つまり利害が種々なる社會事相を生んだのである。

二、人類の生存は衣食住卽ち物質に依る。我れ〳〵は物質を離れて生存は出來ない。然るにその物質は自然の供給だけでは不滿足である。自ら手を加へて必要品を生産しなければならない。それも各個別々の生産では物足らない。そこで協同して生産し、協同して生存の資料とする様になる。そこにお互の間の生産關

係を生じ、これを規定する必要が生じる。それが經濟組織の始めである。社會意識はこれから起こる。その社會意識の基礎の上に政治、道德、宗教、藝術等が建設されるのでる。

三、右の生産關係は漸次進化して遂に資本主義の經濟組織となつた。茲に資本家卽ち資本を所有して他人を使用し、餘剰利得を取得するものと、勞働者卽ち資本家に使役せられて僅かの賃銀に生活し、餘剰勞力を資本家に供給するものとの區別を生じた。この二階級は利害互に相反する。そこで兩者間に闘爭が絶えない。これが今日の世相である。

四、併し、右の闘爭は必然のものである。これを免るゝことは出來ない。これも社會進化の一過程で、これに依つて社會は漸次社會主義的世界へと進んで行くのである。

五、資本主義の經濟組織は當然崩壞すべき運命に立つて居る。次に來たるものは無階級無鬪爭の社會主義的世界である。こゝに至つて始めて全人類の幸福が得られる。

そこで社會主義者は、『同じ人間でありながら、支配者と被支配者と別かれて居るのは、社會的正義に反する。速かに資本主義的經濟組織を破壞して、萬民平等の理想鄕を現出せしめねばならぬ。』と絶叫し、勞働者は自己の利益と、社會的正義との聲に誘はれて、階級打破を目標とし、團體的勢力を武器として同盟罷業、怠業等を實行する樣になりました。勢の趨く所、資本家に對する憎惡となり、延いて政治、道德を呪詛し、終には破壞そのものを以て正義なり道德なりと信ずる極端派さへ生じて來たと思ひます。

私の社會主義に對する解釋は右の樣な處でありますが、假りにそれを間違ないものとして、私の意見を述べて見ます。マルクスの經濟組織發達の歷史的見解については、私は寧ろ實在の統一的發展性から生じたものと解釋するのでありますが、それを論ずる爲めには、私の哲學を詳述しなければならないので、今はそれを省略いたし、將來の理想鄕の現出について意見を述べて見ます。

私は社會主義者の如く、自己の個在を信じ、それの利慾を擁護しつゝある間は、理想鄕は斷じて現出しないものと信じて居ます。我れあり彼れありとする差別觀は、軈て階級思想であります。個在の自己を澤山竝べて置いて、その間に何等の階級をも生じさせまいと

するのは、實に不合理であります。個在の自己には一つとして同等のものはありません。その體力に於て、その心力に於て、千差萬別であります。況して利慾をそのまゝに擁護するに於ては、各自その心身の力を盡して利を爭ふことは明白であります。隨つてその優秀なるものが他を壓迫することは數の免れないことであります。こゝに優劣の階級は當然生じて來ます。若し强ひて階級を生じさせまいとすれば、其處に非常なる壓力を加へなければなりません。壓迫より免れて又壓迫に入ることは殆んど無意味な業と思ひます。理想鄉どころか修羅の巷になりはせぬかと恐れるのであります。

平等といふのは無差別でなければなりません。個在自己がなくなるのでなければ本當の平等にはなりません。個在自己がなくなると

いふは、他人と融合するといふことであります。他人と融合するといふのは、他人と自分との間の墻壁がとれて、喜憂を共にするといふことであります。個在自己の固定觀念に捉はれて居る人々には、そんなことは考へられないかも知れませんが、自己はいくらでも擴大するものであります。否個在自己などといふのは、一種の假像であり幻影であります。何處に自己が個在てあるといふ證據がありますか。自己といふ觀念は我れ〳〵が日々の經驗を反省した時、常に同じ樣に或る系列をなした感覺が起こる、その感覺の系列に命名したものに過ぎないのでありまして、つまり一つの抽象概念であります。これを實在と思ふのは大きな間違であります。實在といふものはその樣に人間の思慮分別で作り上げたものではないのであります。現實に存在して疑ふことの出來ないものでなければならないのであ

ります。私は社會主義者に本當の實在を見て戴きたいと思ひます。實在を見るといつても難かしいことはありません。極めて純眞なる心を以て物に對すればよいのであります。さうすれば我れ〳〵は必ずその對象物と融合して、自他の差別がなくなつてしまふのであります。そこに孤明歷然たる實在が現はれて來ます。この實在は人に說明することは出來ないのでありますが、誰れが如何に反對しても疑ふ餘地はないのであります。物だの個在自己だのといふは、この實在から抽象して假りに命名したものであります。隨つて個在自己は實際には存在して居ないといふのが本當であります。個在自己がないとすれば、それの利慾などに導かれて齷齪して居るのは一つの迷ひだといふことに氣がつくでありませう。否、迷ひであるのないのの沙汰ではありません。本當に對象物と融合した場合には、個在

自己の觀念は全く消え去つてしまつて、自利の心を起こせといはれても起こらないのが實際であります。御覽なさい。社會人類に融合した志士仁人は、己れの一命さへも平氣で投げ出すではありませんか。つまり彼れ等の自己は社會人類大に擴大したのであります。こんなに自己が擴大するのは、無理やりにするのではありません。實在それ自身に發展統一の性質を有つて居る爲めであります。斯くの如く人と人とが融合して自他の差別がなくなつたのが本當の平等であるのであります。この境地が理想鄕であるのであります。この境地には何の階級もありません。何の惱みもありません。何の鬪爭もありません。眞實の天堂極樂であるのであります。社會主義者の理想鄕などといふのは、全くの空想であります。決して實現するものではありません。然るにそれを夢想して妄りに破壞々々と猛進する

などは、非常な誤りと思ひます。人間の精神を改造しないで、組織制度だけを改め、それで理想郷を實現しようとするのは、綿絲の織り方を工夫して絹布を作らうとする樣なもので、その不可能たることは論を俟ちません。

人間の精神が改良されさへすれば、組織制度などは、實はどうでもよいのであります。例へば君主獨裁の政治であつても、その君主が、全く自己あるを忘れ國家民人の喜びを喜びとし、憂ひを憂ひとするものであつたならば、共和政治や議會政治の樣な、小面倒な手續を要しないだけでも有益だと思ひます。共和政治、議會政治でも、その代表者が我利々々亡者であつたならば、政府や議會は、私利の獲得場で、國家民人に何等の效益もないのであります。隨つて社會

主義的社會の組織に改めた處で、このまゝの人間では何の役にも立ちません。理想郷どころか、無規律無秩序の混亂に陷るのが、おちだらうと思ひます。併し社會主義者の、平等に進まうといふ考は、今の世相上確かに一進歩と思ひます。この上はその眞の平等といふのがどうすれば得られるか、徹底的に考へてもらひたいのであります。聞く所によれば、社會主義者の中にも全人類愛の立場からこれを主張するものがあるといふことでありますが、それならば大層結構なことと思ひます。私は切にそれ等の人々が、本當の愛に徹底せんことを希望するものであります。徹底したが最期、破壞鬪爭に日を送る樣なことは斷じてあるまいと思ふのであります。

併し、『今日の樣な特權階級の横暴、無產階級の窮狀をどうするか。

一日もそのまゝに放置することが出來ないではないか。頭の改造は容易でない。闘爭もやむを得ないではないか。』といふかも知れません。それはさうでありますが、今日の現實の問題としては、私は資產階級特權階級の人々に一日も早く目覺めて貰ひたいと思ふのであります。一日も早く社會民人を體驗して社會民人の血液がそれ等の人々の心身に流れる樣になつたならば、どうして他の窮狀を見て居ることが出來ませう。どうして自分獨り樂々と暮して居ることが出來ませう。社會政策は獨りでに行はれるに相違ありません。くれぐれも私は資產階級、特權階級の覺醒を望むものであります。

私の所謂理想鄕には、一切の犧牲がなくなると思ふのは間違であります。實在の統一性發展性は時々刻々變易化成をして居るのであります。

ますから、一局部一局部には色々の變化がありませう。他のものを己れの犧牲に供することもあると同時に、己れが他のものの犧牲となることもありませう。けれどもお互に己れといふものを忘れて居るのでありますから、惱みは少しもないのであります。丁度或る生物が他の生物を食餌にしたり、又食餌にされたりする樣なものであります。

以上甚だ粗笨でありますが、社會主義に對する私の考を述べました。貧弱な社會主義觀の上に立てた意見でありますから、定めて見當違ひの點もありませう。それ等は切に御指摘を仰ぎたいと思ふのであります。

或る政治家へ

議會に於ける毎日々々の質問應答、誠に御苦勞千萬に存じます。併し質問の多くは政府者の弱點を衝くことであり、答辯の多くはその場を糊塗することであるのは、どういふ譯でありませうか。我れ〳〵の眼には、今の政治家は只偏へに政權の爭奪にばかり汲々として居る樣に映じますが、問違ひでせうか。未だ一たびも議會に於て涙の零れる樣な憂國の聲を聽かないのは何故でせうか。今日の世界の大勢はどうです。我が帝國の現狀はどうです。生活の不安、思想の動搖、始んど極點に達して居るではありませんか。これが政治家の眼に映らない筈はありません。眼に映つても尙一掬の涙を濺ぎ得ないとすれば、それは何かに捉はれて居るに相違ありません。私利

私慾、黨利黨慾、そんな殼を被つて居ては、國家民人に對する涙は湧いて來ません。畏れ多くも明治大帝は、御生涯中一切の逸樂安易を御捨てになつて、帝國の休戚安危を念とせられました。今の政治家は時に大帝の遺志を云々することがありますが、それは大帝の憂國の聖旨を繼承するのでなく、やはり政權爭奪の具に使はうとするかの樣に見えます。何たる淺ましい心情でせう。政治家に尊ぶ所は、愛國愛人の至誠と、高邁透徹の見識とであります。寢ても覺めても只國家民人の利害休戚に沒頭し、それと融合し、それと一致し、自己の利害得喪を忘れ去るのが、愛國愛人の至誠であります。國家民人危機の根源を探り、これが根本政策を樹立するのが、高邁透徹の見識であります。今の政治家中この二つの資格を具へて居るものが幾人ありますか。私はこれを思ふ毎に常に長大息を禁じ得ないので

あります。

なるほど今日の政治家も、時々教育の振興とか、思想の善導とか、生活の安定とかいふ様なことをいひますが、どうもそれは口先だけで、本當にやる考はない様であります。本當にやる考があれば、我が國の今日の政策は根本から建て直さなければなるまいと思ひます。私は今その一々を指摘することを止めますが、政治家諸君が國家民人の利害休戚を感ずること、己れの利害休戚と同等であつたならば、その政策の如きは他の指摘を待たずして幾らでも出て來ることと思ひます。その政策に多少の違算はあつても、愛國愛人の至誠は、必ず成功を將來するに相違ありません。我れ〳〵は諸君のその至誠に信頼し、決して苦情は申さない積りであります。嗚呼國家民人の爲

めに萬斛の熱涙を濺ぐ政治家はないか。國家民人の爲めに一命を忘れる政治家はないか。小政策小計畫の是非善惡などを云々する時ではありません。只國家民人の生活の不安、思想の動搖に對して根本的大方針を樹立すべき時と思ひます。

國家が一人にして興こり一人にして亡びた例は決して乏しくありません。あなた御一人でも本當に愛國愛人の至誠に燃えて猛進するならば、この頽廢せる政治界を匡濟することが出來ない限りはありません。どうか胸奥の至情に愬へて、國家民人の爲めに忘我の大活動をなし給はる様、切に〳〵御願ひいたします。至囑々々。

メンタル、テストに就いて或る人へ

近世科學的心理學の進歩は頗る顯著であります。特に色々の機械を應用しての測定は、これ迄人の氣附かない精密さを以て、諸心力の働き工合を表記し得る樣になりましたので、一段の進歩を加へたと思ひます。これを工場商店官署等の或る種從業者に應用して可なりの成績を擧げ得たることも事實であります。近頃は又學校に於ける成績考査特に選拔入學の考査に應用せられて、一つには從來の考査の不備を補ひ、一つには一時の僥倖を獲んが爲めに無益なる試驗勉强をなす弊を矯めようとせられて居ます。私は斯る進歩を大に歡迎すると同時に、尙望蜀の感を懷いて居るものであります。

元來人間の精神は、昔の人々が考へた樣に或る心力と心力との集合ではありません。寧ろ一つの有機體でありまして、これを區分して考へることは出來ないものであります。それ故一部々々の現はれを檢査し、それを總計して見た處で、本當の精神全體は現はれて來ないのであります。隨つて有機的に統合せる精神の全體を測定する方法が完成しない限り、本當に心力の檢査は出來ないものと思ひます。ところが我れ〳〵の精神が本當に有機的統合を完成した場合には、我れ〳〵の自覺は消え去つて、精神はそれ自身に生長發展をして參ります。その活潑々地なる活動は、我れ〳〵の常識ではちよと想像も出來ない位であります。これは事實がこれを證明するので決して疑ふ餘地はないのであります。今の科學的心理學者は、精神の斯かる本質を認めて居りますや否や。それを確めて置きたいと思ふ

のであります。若しこれを認めるとするならば、本當の檢査はこゝに根據を置かなければならないと思ひます。けれども、精神が本當に有機的統合を完成した場合は、最早絶對的の境地であります。その境地には自他の差別がありません。時間も空間もありません。因果律も行はれません。總べてが現實で、具體的であります。その者自身が體驗するだけで他に說明の言葉もありません。他人は只その足跡を調べて、その活動狀態を想見するだけであります。心理學者はその想見によつて或る程度までの測定をするであらうと思ひますが、根が絶對的のものであり、本質的のものでありますから、如何に精細に分析しても、總量を摑むことは殆んど不可能であらうと思ひます。

も一つ現今の檢査に對する疑問は、被驗者の精神を統合狀態に置くと分裂狀態に置くとによつて、同一人の成績に非常な相違を來たしはせぬかといふことであります。受驗者が、或は恐怖或は羞耻、又はその時の環境によつて、精神を分裂せしめた場合は、これがよく統合せる場合に比して成績の劣ることは明瞭であります。又統合にも自ら程度があります。前に述べた樣に自己を忘るゝ迄の統合をした場合と、その他の場合とでは、その成績にも自ら差等があるべき筈であります。これ等の研究が完全に成就しない限り、精神の考査はまだ〳〵不完全のものであります。本當のことをいへば、精神の考査といふのは、實は統合の程度を檢査するであるかも知れません。

斯くは申しますものの、精神考査が段々細に入り微を穿つことは、誠に結構のことと思ひます。よしそれが精神全體を測定するには不完全なものであるとしても、精神に對する我れ〳〵の意識内容は益々豊富となるのでありますから、私は愈々益々研究の細微に進むことを希望するのであります。併しそれのみに依賴することは出來ません。檢査者は人の精神全部を綜合的に見る直覺力をも應用しなければなりません。これが分析的觀察よりは肝腎に中る場合が仲々少くないのであります。

あなたがメンタル、テストを御利用なさらうと思召すなら、大略右の條々を考へ合せてなさることを望みます。大過ない成果を收められようと思ひます。

或る病人の子息へ

御手紙拜見いたしました。御老母様三四日程前から丹毒に罹り、入院治療中の趣、誠に驚き入りました。この病氣は頗る急激性で恐ろしいものと聞いて居ますから、御油斷なく御手當の程切に御願ひ申し上げます。それにつき小生の心附きを左に申し上げますから、御老母様に御勸めを願ひます。

御顔全部に炎症を起し、燒ける様に感ぜられるとのこと、御老母様の御苦惱御察し申し上げます。併し病苦に心を傷め、御煩悶遊ばされては、治療上益々惡影響を及ぼすことと思ひます。健康の人で

さへ、苦惱煩悶する時には、顏面ほてり、逆上氣味となることは普通であります。まして丹毒の樣な御病氣では、それが病勢を募らせる結果となることは疑がありません。それ故苦惱煩悶は斷じて止めさせなければなりません。苦惱煩悶を除く唯一の方法は心を一所に集注することであります。御老母樣は、兼ねてより念佛の信者でありますから、心を一所に集注するには絶好の資格を持つて居ます。御病臥中一刻も休まず、一心不亂に御念佛を唱へさせて下さい。病氣が苦しければ苦しいほど、愈々益々勢こめて唱へる樣にお勸めして下さい。出來得る限り一息に何度も唱へることが大切であります。これを本眞劍に實行してさへ居れば、心身は必ず統一して終には忘我の狀態となり、病苦は全くなくなります。元來生物の生命力と申すものは、それ自身に新陳代謝の機能を營み、病氣障害を天然自然

に征服して往くものであります。生理學の方で自然良能といふのは卽ちこの生命力のことであります。如何に醫者の治療を受けましても、この自然良能卽生命力が働いてくれなければ、病氣は癒るものでありません。ところがこの生命力と申すものは、心身が完全に統一した時に、最も活潑に働くものでありますから、病氣を治療する秘訣は、心身を統一させることにあるのであります。苦惱煩悶と申すは、その統一が破れた時に起こるものであります。隨つて苦惱煩悶を續けて居ては、癒る病氣も癒らずにしまふ結果となります。この道理をよく御會得成され、御老母樣には念佛を以て心身の統一を完成し、苦惱煩悶から免れる樣に御勸めなさることが焦眉の急であります。斯く御努めになれば、生命力はそれ自らが活動して必ず病氣を退治してくれます。まして醫藥の力は消毒榮養等を助けますか

ら、病氣は平癒せずには居られないのであります。小生はこれまで、右に申した原則を色々の人々に說き示して、その人〳〵に相應した方法を實行させましたが、何れも驚くべき效果を收めて居ます。御老母樣も右の統一を御實行なさりますれば、平癒疑ひないと信じます。夢疑ふことなく御勸め下さることを祈ります。敬具

右の書面を速達便で送つた所が、名宛人は早速病人に勸めて勵行させたさうであります。そして三日目には顏面の炎症が全く消えて、非常に快くなり、醫師も治癒の迅速なのに驚嘆されたといふことであります。

熱拳嗔罵錄

これは、私が雜誌『雄辯』の爲めに執筆し、同誌大正十二年新年號に載せたものであります。その時のはしがきに

『本篇は城北に隱棲して而かも一世を睥睨して居る無礙老師の語錄である。私は先年來老師の膝下に侍して親話を拜聽して居るが、一言一句實に血滴々の熱拳嗔罵である。これを若干の門下生だけで私するのは誠に惜しい感じがするので、大要を筆記して世に公にすることにした。老師若しこれを見たならば、又復熱拳嗔罵を浴せかけるに相違ないが、それは覺悟の前である。

川村理助識す』

大正十一年十二月三日

と書いて置きましたが、その無礙老師といふのは、客觀的實在の人

ではありません。併し常に私の胸臆に實在して、私に熱拳嗔罵を浴せかける一無位の眞人であります。この眞人は獨り私を鞭撻激勵する許りでなく、又私の形相をかりて、他人に向つて熱拳嗔罵をあびせ掛けます。私が時に時世を憤り、熱辯を揮つて大獅子吼するのは、全くこの眞人のなす業であります。

第一則　陞格運動

今茲の十月初旬であつた。無礙老師をその隱邸に訪問した。老師は庭へ出て菊の手入をして居られたが、私の顏を見ると、

師『どうだ、高等師範學校陞格案は甘く行きさうか。』

私『何だか經費緊縮とやらで風向がひどく怪しくなつて來ました。是

非次の議會には提案して貰ひたいと思つて居ますが、どんなことになるか、今では甚だ心配でなりません。

師『心配などしたつて何になる。心配するひまに當局にぶつつかつて眞劍勝負をしろ。お前は卒業生團體の實行委員長だといふではないか。何をぐづ〳〵して居る。負けるなどといふことは夢にも想ふな。屹度勝つて見せるぞといふ意氣込でやれ。それには一切の欲望を棄てゝ懸らなけりや駄目だ。生命まで棄てる覺悟でなけりや駄目だ。何時、何處で、どんな方法で自裁するといふことまで決定して置くと、心は平靜に歸して落着きが出來る許りか、一言一行血のたれる樣な深刻味が出て來る。それで始めて他を動かすことが出來る。それで始めて永遠の生に入ることが出來る。死を知らない樣なものに生の眞味の分かる筈はない。お前はその邊の

ことは分かつて居る積りて居たが、まだ本當の自由人にはなり切れないかの。(私が最近「自由人となるまで」といふ小著を公にしたのでこの言葉があつたのだ。)まだ生命は惜しいかの。まだ子供に對する恩愛の絆は斷ち切れないかの。』

『先生もう何も被仰つて下さるな。兩頭俱截斷。一劍倚天寒。』

私は翻然として悟る所があつた。それで爲藤副委員長と共に、十月十七日から、十一月三日まで、毎朝七時から自動車に乘つて內閣各大臣は勿論、各方面に於ける要路の方々を歷訪した。訪問した延人員六十八名。面會した人員三十二名。面會の出來るまでは何回でも訪問した。どうしても面會の出來ぬ向へは書面を認めて提出した。次に揭げたのは、私が加藤首相に送つた手紙の寫しである。私共の

熱誠が幾分なりとも通じたと見え、內閣會議に於て陞格案は本豫算に編入せられ、來るべき議會に提出されることになつた。とにかく、數年來の懸案たる困難な問題が、斯くも易々と運んだのは、老師の激勵與つて大に力があつたと信ずるのである。

加藤首相におくつた手紙

これは私が若溪會實行委員長として、大正十一年十月二十三日、木村秘書官を介して加藤首相に差出した手紙の寫しであります。差出した手紙は、原稿を見ながら淨寫の際、妥當でないと認めた字句を改訂しつゝ書いたのでありますが、極めて匆忙の際でありましたので、改訂箇所を一々原稿に書留めて置きませなんだ。それ故原稿を便りとして綴つた本篇は、實際差出した手紙と字句に於て多少相違して居るかも知れません。けれども、その趣旨は寸毫違つて居らないことを保證いたします。

拜啓、先般來一度御面會を願ひ、高等師範學校陞格問題につき微衷開陳いたしたくと存じ、宮田書記官長を經て數回御都合を伺ひ、又親しく參邸の上同樣御都合を伺ひ申し上げたのでありますが、未だにその機會を得ませず、甚だ遺憾に存じて居ます。數日前にも山田祕書官に面會致し御取次を願ひ出でて置きましたが、同祕書官のお話では、近頃少しく御不例に入らせられ、醫師の注意もこれあり、十日間許りは極々重要事件の外安靜を保たせられて御いでとのことでありましたので、態と御遠慮申し上げ、御恢復後の御取次を御願ひ申して立ち歸つた樣の次第であります。國家多事の場合折角御療養遊ばされ一日も早く御快癒あらせられる樣御祈り申し上げます。それと同時に御快癒の上は一度御面會の機會を御與へ下さる樣切に御願ひ申し上げます。御面會に先だち一應高等師範學校陞格に關する私の意中を書き綴り貴覽に供します。折を見て御一讀下さらば、誠に幸福に存じます。

高等師範學校陞格問題は多年の懸案でありまして、他の陞格問題と共に前政府總辭職の一因となつた程の問題でありますから、閣下に於ても委細御承知のことと存じます。現政府はその閣僚の顏觸れから見ましても、陞格問題には御了解のある方が多い樣に思はれますので、私共は當然次の議會に於て御解決下さることと確く信じて居ました。然る處近頃風說によりますと、財政の逼迫から又々不成立に終るであらうとのことで、私共は大に驚いて居る次第であります。御承知の通り、前政府は前々議會に於てこれを解決しようと大に努力せられたのでありましたが、教育委員會々長の辭職によりて

一頓挫を來たし、前議會に於きましては教育評議會の議を經たる原案を提出し、衆議院は大多數を以て通過いたしましたが、貴族院に於て審議の最中會期が盡きて又々不成立となりました。私共幷に學校職員生徒等は非常に失望落膽したのでありますが、事情誠に止むを得ないこととして、今日まで隱忍し來議會に於ての解決を一日千秋の思ひで待つて居るのであります。若し來議會に於ても解決の途がつかない樣なことになりますれば、職員生徒幷に卒業生の失望は申す迄もなく、心ある教育家は或は現代の政治に對して絶望の聲を擧げるかも知れません。成る程帝國財政の基礎を確立する爲めには、政費の節約も必要でありませう。又新事業に指を染めぬ樣なさることも大切でありませう。けれどもこれを國家政策の大局から見て、高等師範學校陞格問題をも後廻はしとなさることは、私共には殆んどその理由を了解することが出來ないのであります。甚だ烏滸がましい申分でありますが、その理由を次に申し上げて御參考に供したいと思ふのであります。

今日の帝國は各方面から見て幾多の危機を懷いて居ると思ひます。詳しいことは申し上げる必要もありませんが、試にその一二を申しますれば、例へば普通選擧問題の樣なものでも、政府既に調査會を設けられた程で、早晩實行せねばならぬ問題と思ひます。又さうする方が立憲國として至當のことと思ひます。けれども今日の國民は遺憾ながら多くは自覺に缺けて居ます。こんな國民を驅つて全部直ちに選擧場に送ることとしたならば、果して如何なる結果を來たすでありませうか。私は謂はゆる煽動政治家などが、只管當選を望む

餘り、大多數の無自覺國民に勞働時間の短縮、勞働賃銀の引き上げ資本家の撲滅、階級の打破等、生嚙りの社會主義者的言辭を弄して彼れ等の歡心を買ひ、續々として議政壇上に送られるといふことになりはせぬかと恐れるのであります。よしそれ程までに煽動せずとも、そんな傾向に國民を導いて行くことは今日までの經驗に徴して餘り間違のない考察と思ひます。私は敢て社會主義者の所說を一概に排斥するものではありません。彼れ等の唱ふる所にも一面の眞理の存することを認めて居るものであります。けれどもそれを程能く消化することの出來ぬ國民に對して、急激に右の樣な思想を吹込み、單に我利私慾の本能からのみ國政を左右しようとする樣な空氣が漲つて來たならば、この帝國は滅亡の外あるまいと思ふのであります。滅亡せざるまでも急激なる變革の齎らす慘禍は實に恐るべきものが

あるに相違ありません。これを救ふ方策は何はさておき、普通教育を振興して自覺ある國民を養成するより外致し方ありますまい。英國あたりでは、是れ迄とても教育が普及してその國民性は比較的健全で、幾多の難問題をよく消化して來ましたが、過般の大戰の跡に鑑み、盛んに普通教育の振興に努め、五歲より十八歲までを義務教育となし、七億有餘の費用を投じて强制的に國民を教育することにしました。誠に見上げたものだと感服するのであります。けれども普通教育を振興するのは徒に多額の費用を投ずるのみが能ではありません。寧ろ優良なる教育者を養成して、彼れ等に獻身的に働かせるのが最先の急務であります。低劣なる教育者が、單に形式的外面的に働いたからとて教育の效果が擧がる筈はありません。

軍備の縮少といふことも今日の場合誠に適當な政策と思ひます。けれども軍備の縮少は國防の不要を意味するものではありません。今日の人類はまだ〳〵戰爭の絶無を保證し得る程進歩しては居りません。それ故國防の用意は平素決して忘れることは出來ないと思ひます。併し國防の完否は必ずしも軍隊軍艦の多少と比例するものではありません。徹底したる國防策は國力の增進にありと信じて居ます。國力の增進策中最も重要で且つ根本的なものは健全なる精神と身體とを有する國民を養成することであります。即ち普通教育の振興であります。一般國民が健全なる精神と身體とを有つ樣になれば、普通一般の兵卒の仕事の如きは、二三ヶ月の訓練で十分會得させられようと思ひます。何も非常な費用を投じて國力不相應の兵卒を養つて置く必要はあるまいと思ひます。これから考へても普通教育の

振興が帝國々策中極めて大切なものであることは明かであります。そしてその普通教育の振興は優良なる教育者の手に依つてのみ期し得られるものであるとしたならば、國家は優良なる教育者の養成に向つて一日も緩うせず、即時斷行すべき譯合と思ひます。

その他混亂せる思想の安定といひ、勞働資本問題の解決といひ、逼迫せる生活の緩和といひ、國民の海外發展といひ、產業の興隆といひ、その歸結を求めれば一として普通教育の振興即ち優良教育者の活動に歸せないものはありません。これ程大切な教育者養成のことが、我が國に於ては餘り重大視されて居ないといふのは、實に不可思議の至りであります。明治十八九年森文部大臣在職の頃は、大に師範教育を尊重し、高等師範學校の如きはその資格に於て帝國大

學と肩を並べて居たのでありましたが、その後漸次これを輕視する様になり、幾多の官私立大學の創設と共に、地位は益々低下し、今日では私共がその所在地すらも知らない様な片々たる私立大學の下風にまでおかれる様になりました。元來教育者の職業は、富貴權勢等には甚だ縁遠く、單に精神生活上に或る興味を感ずるだけのものであります。只さへ富貴權勢を憧憬の目標としたがる現時の青年を驅つて、教育者生活に赴かしめることは非常に困難であるのに加へて、學校の地位が上の如き狀態であるとしたならば、有爲の青年がこれに集つて來る見込は到底立ちません。どうして優良なる教育者を養成することが出來ませうか。

御承知の如く、高等師範學校は普通教育者を養成する教育者を養

成する學校であります。換言すれば普通教育の總本山であります。その本山がこんな有様では、普通教育の振興は到底望めません。實に慨歎の至りであります。米國あたりでは初等中等を問はず教育者の養成は總べて大學程度の師範學校に於てなす様になつて來ました。現に加州だけでも五箇の州立師範大學が設置されてあるさうであります。又戰後異常なる財政の窮乏に呻吟して居る獨逸では、普通師範學校を悉く大學に改めることに確定し、着々それに着手して居るさうであります。然るに我が國では、師範學校の教師を養成する高等師範學校さへ大學にすることが出來ないで、今だに彼れ是れ躊躇して居るといふのでありますから、只々懸隔の甚しいのに驚くばかりであります。

今日財政が窮迫して居るといふことは私などにも能く了解が出來ます。けれども上の樣に國家の心臟ともふべき大切な機關の創設費、それも僅々二三百萬圓位の金、おまけにそれを數年に分けて支出するといふことが出來ないとはどうしても考へられません。西伯利亞の出兵はどれほどの効果を國家に齎らしたか知りませんが、十億近くの費用と、數千の人命を損したと聞いて居ます。かういふことには勇敢に實行する國家が、この重要な施設の爲めに、この僅少な金を出すことがどうして出來ないでせうか。私には到底了解が出來ないのでまります。若しどうしても支出出來ぬといふことであります れば、私共は慨歎の餘り只悶死する外ありません。由來一地方の利害問題等國家の全局より見れば極めて輕微な問題でも、それが政治家の選擧地盤の擁護、若くは黨勢の擴張等になる樣なことでありま

すと、血眼になつて奔走努力する政治家がありまして、大抵目的を達するのでありますが、優良なる教員養成などといふ問題になりますと、直接にも間接にも利害關係がない爲めか、如何にそれが國家の重要問題であつても極めて冷淡で、甚だしきは口實を構へて反對する者もある位であります。それで私共が如何に絶叫しても後廻はし後廻はしで終に今日に至つたのであります。私共特に私などは、高等師範學校の出身者といふだけで、陞格しようがしまいが、一厘一毛の利害の及ぶ身ではありません。只世間も政治家も餘りに無理解なのに公憤を發し、十年間も寢食を忘れて奔走して居るのであります。何卒衷情御酌み取りの程御願ひ申し上げます。

以上の所說は私一己の愚見でありますが、三千有餘の茗溪會員、

學校の職員生徒、皆同感であらうと信じます。特に理想に燃え、情熱に燒けて居る青年學生の如きは、世間特に政治家の無理解に憤慨し、これ迄とても幾度か、學校を退いて離散しようとしたのであります。青年の心理を想ふ時、必ずしも無理とは謂はれないのであります。けれども私共はその度毎に情理を説いて抑止して來ました。公憤に熱し切つた多數の青年學生が、理想に向つて躍進せんとする前に立つて、それを抑止するのは、局外者が冷靜に考へる程容易なものではありません。私共は何時でも一命を拋り出して正しい道へと導いたのであります。併し次の議會でも尙解決が出來ないとしますれば、佛の顏も三度と申す如く、到底抑止することは出來ますまい。否私共でも隱忍しきれません。その結果を考へて見ますと、强要の意味でも何でもなしに學校を退散するのでありますから、これ

を處罰しようもどうもない。處罰したとて何の効果もありません。剩す所は學校が假令一時にもせよ廢滅に歸すること、學校當事者及び文部當局者が責任を負ふことが殘るだけであります。こんな場合には、得て野心政治家が機に乘じて喧々囂々世論を動かし、術策の種にしたがるものであります。隨つて非常な混亂を來たすことは明かであります。それは兎に角、普通教育の本山に於て斯る不祥事の起こることは誠に慨はしいことであります。何とでもしてこれを阻止しなくてはなりません。それで私は茲に一大決心をして居ます。若し不幸にして斯る場合が生じたとすれば、私は自分の一命を斷つて彼れ等を諫止し、他方その血に依つて政治家幷に國民の覺醒を促さうと思ふのであります。能く世間には決死といふ樣な重大な言葉を輕々しく使用するものがありますが、私は斯る浮薄な人間ではあ

りません。勿論奇矯な言辭を弄して他を威嚇しようなどといふ權謀家では尙更ありません。只詐らざる衷心の覺悟を有りのまゝに述べただけであります。

我が國の教育も量に於ては可なりに進歩して來ました。けれども質に於ては極めて遺憾の點があります。教育を只一つの職業と見做し、外面的のことだけ働いて居る樣な教育者であつたならば、到底今日の帝國の危機を救ふことは出來ません。教育者は一方教育の理論方法に精通すると同時に、一方濟世の大志を懷き社會國家の爲めとあらば何時にても死を辭せざる牢固たる覺悟と、熱烈火の如き至誠とを持つて居なくてはならないのであります。私共が陞格を願うて居る高等師範學校は、實に斯る教育者を養成するのを使命として

居るのであります。かういふ教育者が年々幾十人宛卒業して國內各地に送り出されたならば、帝國の將來も必ずしも悲觀するに及ばないと思ふのであります。けれども世間殊に政治家が、何時迄も無理解で、如何に絶叫しても顧みて下さらないとしたならば、教育者と難も感情の所有者であります。さう何時までも隱忍は出來ません。堪忍の緒が切れて帝國を見棄てる樣になるかも知れません。

以上の所說を概括すれば、優良なる教育者の養成は國策として極めて緊急且つ重要なること、高等師範學校の陞格は是非來議會に於て御解決下されたきこと、金額の多少、完成年月の長短は財政の都合によつて程よく按排酌量せられたきこととといふに歸着いたします。

文字甚だ激越に流れ、尊威を冒瀆した點少くないと存じます。これ皆私の至誠の迸りでありますから、惡しからず御寛恕を願ひ上げます。何れ御面謁の節委細申し上げたいと思ひますが、取敢へず右のことだけ申し上げて置きます。金玉の御身、時節柄切に御攝養の程願ひ上げます。敬　具。

第二則　或る中學生へ

中學生『私は數學が嫌ひで困ります。若しかすると落第するかも知れません。どうしたら宜いでせうか。』

師『落第したらよからう。』

中學生『落第しては困ります。友人の手前世間の手前恥かしいです。』

師『莫迦。お前は數學といふものと、世間の手前といふものに征服されて居る。臆病者、弱蟲。なぜそれ等を征服してやらないのだ。』

中學生『征服といふと。』

師『嫌ひな學科ほど熱心に勉强するのだ。初の内はつらくてつらくて泣きたくなるかも知れん。其處が辛抱だ。命懸けでやつて見ろ。人の出來ることがお前に出來ぬといふことがあるか。その難所を通りこせば、段々面白くなつて來る。其處で力を弛めず、遣り拔くのだ。今度は面白くなつて來て、止めろといつても止められなくなる。これが學科を征服したのだ。今のお前は數學から征服されて、へこたれて居る。臆病者、弱蟲でなくて何だ。寢食を忘れる程一心不亂に勉强しても少しも面白味が出て來ないのなら、それはお前の頭が數理を領解する能力に缺けて居るのだ。

落第は當然だ。中學などは止めて何か他のことをやれ。そして出來ないことは出來ない、出來ることは出來ると有りのまゝを世間に見せつけてやれ。何も世間體を飾る必要はない。それが世間を征服したのだ。今のお前は世間の評判がこはくて、びく〳〵して居る。卽ち世間に征服されたのだ。臆病者、弱蟲でなくて何だ。』

中學生『どうも有り難うございました。屹度遣り拔いて見ます。』

數月の後右の中學生が來て、

『敎に隨つて非常に刻苦して數學を勉强しました。所が少しづつ分かるに隨つて段々興味が出て、今では却つて數學が好きになりました。都合によつては將來數學關係の學問を專門に研究しようかと思つて居ます。』

師『莫迦。お前は又興味に征服された。喜びにも征服されるな。苦しみ悲しみにも征服されるな。何も彼も征服して行け。』

第三則　或る若き夫婦へ

若い人妻『先生。私は今の夫と四年前から互に好き合つて一昨年秋結婚いたしました。最初は春の野の胡蝶の樣な氣分で、互に樂しく幸福に暮らして居たのですが、その後夫の愛が段々私から去り、近頃では他に增す花が出來たと見え、三日に一晩位しか宅に歸つて來ません。歸つて求ても突慳貪な顏ばかりして居て、やさしい言葉一つかけてくれません。私は毎日毎日涙に暮れて居ます。先生。どうしたら、夫の心が元にかへりませうか。敎へて戴きたいので

あります。』

師『當り前だ。お前は初めから夫を愛したことがない。』

妻『先生。それは違ひます。私は最初は申す迄もなく、今でも夫を愛して居ます。それでなければ、こんなにして敎を受けには參りません。』

師『誠つけ、莫迦者。お前は最初から只自分の慾情滿足の爲めにその男と握手したのだ。男がかはいくて握手したのではない。男もその通りだ。矢張自分の慾情滿足の爲めにお前と結婚したのだ。相手は誰であらうと慾情さへ滿足すればよいのだ。つまりお前達はその慾情といふものに征服され、それの奴隷となつて今日まで來たのだ。莫迦者共、臆病者共、今日の樣な關係になるのは當然すぎる程當然だ。』

妻『さう被仰られると、成程私共は本當に相愛して結婚したのでなく、自分等の慾情滿足の爲めに夫婦になつた樣にも思はれます。けれども既に結婚した以上、今更別かれることも出來ません。特に私は親の許さぬ結婚をしたのでありますから、おめ〳〵親の家へは歸れません。どうしたらよいでせう。』

師『どうもかうもない。本當に夫を愛してしやれ。愛して愛して愛し拔いてやれ。愛するといふのは融け合ふといふことだ。夫と己れと心身が二つだと思つてはならぬ。全く一つだと思つて萬事をして行くのだ。夫婦の間に批評眼が働く樣では駄目だ。盲になつて行け。母親が子供を愛するのを見ろ。子供の一喜一憂は母親の一喜一憂ではないか。あゝいふ風に夫を愛するのだ。さうすれば、夫はお前の掌裡のものだ。お前の思ひ通りどうでもなる。つまり

お前が夫を征服したことになる。』

一年程たつてから、右の若い妻が夫と連れ立つて師の許を音づれた。

夫『先生、私共は本當に莫迦者でした。臆病者でした。私も家を外にして慾情のまゝに爲たい放題のことをして居ましたが、妻が一年程前から何となく私を引きつける樣になり、何時とはなしに花柳の巷へも足が遠くなり、今では妻でなくては夜も日も明けぬ樣になりました。先日妻から先生の教訓のことを承はつて、本當に目が醒めました。戀愛の眞味が始めて分かりました。これから後は友白髮まで同心一體となつて暮します。誠に有りがたう存じます。今日は餘りの嬉しさに御禮にあがつたのでございます。

師『何だと、友白髮まで同心一體となつて暮すつて。莫迦。お前達二

人はやつぱり二人ぢやないか。一人が病氣になつたからつて、他の一人まで病氣になることは出來まい。一人が死んだからつて、他の一人まで死ぬ譯には參るまい。二人は何處迄も二人だ。間違ふと本當の戀愛といふものに征服されて情死などする樣になるぞ。だが、ちよと訊くがね。お前達は自分達の慾情を征服して本當の戀愛に生きるやうになつたといふが、それで慾情の滿足は出來ないかね。慾情の滿足は以前よりも十分に出來る筈だがどうだね。慾情を征服するのが慾情を滿足する所以だといふことが分かつたかね。俺などは四十六の時から全く女色を絶つて、觀世音菩薩を妻にして居るが、慾情の滿足は十分に出來て居る。アハヽヽヽ。』

第四則　或る小學教師へ

小學校教師『私は今八十圓の月俸と年功加俸と住宅料と合せて毎月九十二圓の給料を貰つて居ます。けれども老母と妻と子供五人と都合八人暮しで、中々生活が困難です。同僚の中には竊かに他人の名義で株の賣買をやつたり、高利貸をしたりして金儲けをして居る者がありますが、私には心が咎めてそんなことは出來ません。ぢやといつてこの儘では子供を中學校へ入れことも出來ない。身教育者の列に居りながら、己れの子の教育も出來ないといふのですから、實に悲慘なものです。先生、こんな時にはどうしたら宜しいでせうか。』

『師』お前は小學校の先生か。俺は教育者は嫌ひよ。教育者といふ奴は

世界中で一番の臆病者で、役人を恐れ、役場の吏員を恐れ、政治家を恐れ、市町村の議員を恐れ、軍人を恐れ、學者を恐れ、新聞を恐れ、雜誌を恐れ、道德を恐れ、法律を恐れ、父兄を恐れ、兒童を恐れ、一切の人間を恐れ、地震を恐れ、雷を恐れ、コレラを恐れ、幽靈を恐れ、見るもの聞くもの何一つ恐れないものはない。その癖僅か許りの金錢をほしがり、同僚同輩の月給が一二圓上がつたの下がつたのと神經を尖らかし、やれ判任官にしてくれ、奏任待遇にしてくれ、正八位がほしいの、勳八等が貰ひたいのと、人間並に俗慾も相當に突張つて居る。つまりこんな俗慾に征服されて居るから有らゆるものが皆恐ろしいのだ、臆病者の本性を完全に現はして居る。こんなに臆病風にとりつかれた者の治療は仲仲容易でない。お前なども無論その仲間だ。併し俺の所へ來て正

直に生活難を訴へるなどはまだ可愛らしい所がある。いさ愚老一流の荒療治をしてやらう。

お前は九十二圓の月給を貰つて居るといつたが、平素それだけの勤めをして居るかどうか。なに朝は八時に出勤して午後の四時まで仕事をして居るッ。僅かそれだけか。それぢゃ九十二圓の給料は高過ぎる。せめて毎日四十八時間位宛働いたらどうだ。俺などは毎日百千萬億無量時間づつ働いて居るぞ。』

教師『どうも先生のお話の意味が分かりません。一晝夜は二十四時間ですから寢ずに食はずに働いてもそれ以上働くことは出來まいと思ひます。』

師『おや〳〵、お前は數學を少しも知らん、厄介な奴だ。面倒だが、先づそれから教へてやらう。お前はこれから何年生きる積りだ。

假りに三十年として、その三十年の仕事を十五年間に仕上げようとしたらどうだ。それには毎日の勤務八時間に十六時間分の働をしなければなるまい。十年間に仕上げようと思へば二十四時間分の働きをしなければなるまい。又五年間に仕上げようと思へば四十八時間分の働をしなければなるまい。其處だ。お前はこれから先五年間しか生きて居ない積りで、三十年間の働きをその五年間に壓縮して働いたらどうだ。壓縮して働けといふのは、心の緊張の度を增せといふことだ。今迄よりも六倍の緊張さで働けばよいのだ。俺などは生に對する欲求が强い。これから先百千萬億無量年生きたいといふ希望を持つて居る。けれども俺は毎日々々の仕事を命懸けてやつて居る。即刻生命がなくなつても後悔しないといふ覺悟でやつて居る。それだから俺の毎日の仕事には百千萬億

無量年の生命が壓縮されてはいつて居る。俺の一言一行を斬つて見ろ。赤い血が滴々とたれる筈だ。この眞劍さがなくてどうして教育といふ仕事が出來るか。言ふまでもなく教育の目的は人を感化するにある。感化は至誠眞劍を以て臨む場合にのみ行はれる作用だ。世界一の臆病者が四方八方に氣兼苦勞して、心にもない表面だけの謔八百を並べ立てゝ、それで感化が行はれるものなら、謔つき彌次郎は天下の大教育家であらねばならぬ。

見るもの聞くもの皆恐ろしいといふのは、つまりは生命が惜しいからだ。生命を棄てゝ懸つた以上、天下に恐ろしい何物もある筈がない。生の欲求は强烈なほどよい。けれどもそれに征服されては天下の臆病者になる。强烈な生の欲求を征服して、一言一行に無窮の生命を盛り込め。無窮の生命の盛り込まれた一言一行は、

永久に亙つて他を感化する力を持つて居る。つまり生の欲求を征服することは生の欲求を滿足する所以だ。生命を棄てることは久遠の生命を得る所以だ。

それだのに、お前達のすることを見ると、毎日々々生命のない言動を機械的に繰返して居る。やれ新教授法だ。やれ新教育說だ。あんなものをひねくり廻はしてどれほどの效能がある。命懸けの活動の中には新教授法も新教育說も無限に含まれて居るぞ。他人の經驗研究も命懸けの活動によつて初めて活かすことが出來るのであるぞ。釋迦を見ろ。基督を見ろ。楠公を見ろ。あれ等が本當の教育者といふものだ。

命懸けの活動の前には給料の多少などは問題でない。金がなくて着ることが出來なければ着ないまで、食ふことが出來なければ食

はないまでのことだ。けれども世の中はよくしたものよ。命懸けで働きさへすれば、食はさせないでは置かぬ。着させないでは置かぬ。德に感じ義に感じた人々は、自分が食はないでも、『先生を餓ゑさしてはならぬ、先生を凍えさしてはならぬ。』と、食物なり衣服なりを持つて來てくれる。先生の子供が中學校にはいれないのは氣の毒ぢやと、學資まで出してくれる。決して心配には及ばぬ。これが本當の報酬といふものだ。それやぢといつてこちらから報酬を催促するなどは莫迦の骨頂だ。催促されては出す氣にはなれないものだ。報酬を忘れて始めて報酬が來る。報酬に執着して居ては報酬は來ないのが常則だ。自分からせがんで取つた報酬は報酬ぢやない。强奪だ。不當利得だ。閻魔の廳へ行けば返させられる性質のものだ。報酬といふものは、いつでも勤勞價値より

は少く受けるのが本當だ。さうしておけばその不足の部分丈けは感謝信用歸依服從等の無形の報酬で補つてくれる。これがなくては人間相手の仕事は出來ぬ。教育家然り、宗教家然り、政治家然りだ、昔から世間の信用渇仰を博した教育家宗教家政治家に、金を溜めて金殿玉樓に贅を盡したものがあるか。給料が少いの、生活が困難だのと、愚痴をこぼして居る間に、眞劍に命懸けで働け。報酬は何等かの形で屹度めぐつて來る。來なくとも念頭にかけるな。これが生活難に處する唯一の道だ。』

教師『御教訓身に染みて有りがたく拜聽しました。是非さうしたいと思ひます。併しどうしたら命懸けになれるでせうか。御序にそれも教へて戴きたいと思ひます。』

師『朽木は彫るべからず、糞土の墻は塗るべからず。誠に困つた奴だ。

お前には感激といふものがないか。少しは腹を立てゝ見ろ。俺にこれ程悪罵を浴せかけられても口惜しいとは思はないか、俺の横ッ面を殴ぐる位の勇氣は出ないか。臆病者。弱蟲。阿房。大莫迦。俺などは今の日本のどの方面を見ても腹が立つてしようがないぞ。政治家を見ろ。眞に社會國家の將來を念頭に置いて盡瘁するもの果して幾人ある。國家百年の大計どころか、二十年三十年の將來さへ考へて居ない。今の日本の危機を救ふ唯一の政策は國民の自覺を促すより外に何もあるまい。思想の安定も、勞資の調和も、生活の安易も、外交の作振も、政治の革新も、國防の充實も、產業の發達も、國民の自覺を根柢としなければ何一つ解決は出來まい。國民の自覺は教育の振興に待つより外ない。それに何ぞや大學の三十や五十出來るのが多いの少いの、義務教育の年限延長が

早いの遲いの、資金があるのないのと、小理窟許り並べて居て一向にやらうとしない。その癖或る地方に輕便鐵道を敷くとか、或る都邑に株式取引所を立てるとかが問題になると、血眼になつて騒ぐ。これは何かしら己れに直接間接の利得がある爲めだ。國費の分配は國家の大局から本末輕重を考へ、最も重要なものから先に支出しなければならない筈だ。それに根本的な教育は最後に廻はし、埒もない小問題を先にするのだからお話にならない。財政の逼迫だ何だといふが、西伯利亞へ兵を出して十億近くの國費を費して居るてはないか。そして何の得る所があつたか。我れ〳〵には一向分からない。そんなことを繰返し、年々歳々政權の爭奪ばかりに浮身をやつして居る。こんな風では實に國家の前途が危ぶまれる。お前達はこれ等を見て少しも公憤が起らないか。教育

者の精神力を以て彼れ等を濟度しようといふ氣にはなれないか。成る程お前達の樣な臆病者は、そんなことは及びもつかない大事だと、夢にも考へて見たことはあるまいが、物は心の持ち樣だ。感激に燃えて發憤すれば、そんな氣になれないことはない。そんな氣になつて專心從事すれば命懸けにもなれる。吉田松陰を見ろ僅かに二十七八歳の窮措大が、九尺二間の茅屋で二ヶ年半許りの教育をやつたのだが、その門弟から維新の大業を翼賛した幾多の英傑を鍛へ出したではないか。教育者は一面國士でなければならぬ。國家の全體がその人に現はれて居なければならぬ。換言すれば一人で國家を背負つて立つといふ氣魄を持つて居なければならぬ。否國民全體がこの氣魄を持たなければならぬ。我れは國民七千萬人の一人だから、七千萬分の一だけの仕事をすればよいなど

といふ、ケチな料簡を持つ樣では、國家は保たれて行く譯のものでない。國民の一人々々に全國家が現はれる樣になつて初めて自覺ある國民といふことが出來るのだ。自覺ある國民を作るべき教育者自身がお前の樣な臆病者では、よし教育の經費を多くしても到底教育の目的は達せられない。政治家などは何の糞、俺が濟度してやるといふ氣込にならなくては全く駄目だ。

こんなことをいつて居ると果てしがない。國家のどの方面を見ても、社會のどの方面を見ても、大に發憤しなければならないことが山ほどある。どれでも好いから、一つ自分が擔當して屹度やつて見せるといふ氣分にはなれないものか。さてさて世話のやける奴原である。』

右の教訓があつて半年ばかり後の或る日、老師は私に、日外の小學校の先生がどんなことをして居るか、樣子を見て來いといふ。命に隨つていつて見ると、彼の先生は最早その學校に居ない。後任者の話す所によれば、つい近頃朝鮮の或普通學校へ轉任したさうだ。そして教育の力を以て朝鮮を日本に同化させて見せるといつて、えらい權幕で赴任したさうだ。

（をはり）

大正十二年五月十五日印刷
大正十二年五月二十日發行

體驗生活

定價貳圓貳拾錢

著作者　東京市外西巢鴨町宮仲二三五六　川村理助

發行兼印刷者　東京市京橋區銀座二ノ一五　株式會社岡本洋行出版部　培風館　右代表者　山本慶治

發行所　東京市京橋區銀座二ノ一五　培風館　電話京橋三三五一　振替東京三二六一七

503
241

終